



『高嶺遺稿』印度哲学（吉谷覺寿口授・天台四教儀）翻刻



目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第一義く第三四義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

卷二　第三五義く第六二義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

卷三　第六三義く第八二義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

注・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

解説　一 高嶺三吉略歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

二 吉谷覚寿略歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

三 吉谷覚寿の印度学講師着任の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71

四 『天台四教儀』の講義目的と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74



はじめに

本書は、『高嶺遺稿』における印度哲学（吉谷覺寿口授・天台四教儀）の部分を翻刻したものである。『高嶺遺稿』は、高嶺三吉（一八六二～一八八七）が帝国大学在学時に受講した講義内容を筆記した計七冊のノートであり、高嶺の一周忌の命日に友人から第四高等中学校へ寄贈された。現在は、金沢大学附属図書館に保管されている。筆記されている講義は、吉谷覺寿（一八四三～一九一四）による印度哲学の他、島田重禮（一八三八～一九九八）の支那哲学<sup>(1)</sup>、榊俣（一八五七～一八九七）の精神病理学、解剖学及び生理学、フェノロサ（Fenollosa, E. F. 一八五三～一九〇八）、ノックス（Knox, G. W. 一八五三～一九一四）、ブッセ（Busse, Ludwig 一八六二～一九〇七）の哲学、審美学、社会学等である<sup>(2)</sup>。印度哲学は、次のように区分されている。

- 一八八六（明治十九）年九月二五日より（第一義～第三四義）
- 卷二 一八八七（明治二十）年一月二九日より（第三五義～第六二義）
- 卷三 一八八七（明治二十）年四月九日より（第六三義～第八二義）<sup>(3)</sup>

なお、翻刻にあたっては、原文を忠実に写すことに努めたが、読みやすさを考慮し、句点を補った。また、判読不可能な文字は□と表記し、誤りと思われる文字には注を付した。

(1) 町泉寿郎「幕末明治期における学術・教学の形成と漢学」(『日本漢文学研究』第十一号、二〇一六年)によると、その一部は井上哲次郎(一八五六—一九四四)による東洋哲学史の講義記録である可能性が高いと指摘されている。水野博太「高嶺三吉遺稿」中の井上哲次郎「東洋哲学史」講義」(『東京大学文書館紀要』第三六号、二〇一八年)には、その部分の翻刻がなされている。

(2) フェノロサによる哲学史の講義録は、池上哲司(監修・解題)・竹花洋佑・西尾浩二・朴一功(翻刻・翻訳・校閲)『フェノロサ「哲学史」講義』(二〇一三年)、村山保史(監修・解題)・竹花洋佑・西尾浩二・朴一功・Michael Conway(翻刻・翻訳・校閲)『フェノロサ「哲学史」講義』(二〇一六年)において、翻刻・翻訳がなされている。

(3) 高嶺が欠席したためか、第八一義の講義については筆記されていない。







## 天台四教儀

### 教觀大綱 第一

抑モ天台一家ノ要義ハ教觀ノ二門ニアリ、豈唯天台ノミナランヤ、釈迦一代ノ教法モ此外アルコトナシ、其教觀トハ教相ト觀心ニテ、假令ハ教相ヲ學フハ眼ノ如シ、觀心ヲ修スルハ足ノ如シ、此二ハ不離ナリ、智度論ニ智目行足到清涼池トアリ、其教相トハ五時八教ナリ、觀心トハ三觀十乘ナリ、五時トハ華嚴時（三七日）鹿宛時（十二年）方等時（八年）般若時（廿二年）法華涅槃時（八年）ナリ、八教トハ頓教、漸教、秘密教、不定教、三藏教、通教、別教、円教ナリ、（後ノ四ヲ四教ト曰フ）次ニ三觀十乘トハ凡ソ化法ノ四教ニ各リ觀法アリ、三藏教ハ折空觀、通教ハ体空觀、別教ハ次第ノ三觀、円教ハ一心三觀ナリ、三觀トハ空假中、十乘トハ四教ノ觀ヲ修スルニ付テ、孰レモ十法成乘ノ行相アリ、此ハ下卷ノ終リニ出ル、然ルニ此教觀ハ孰レヨリ起ルゾト其源ヲ尋ヌルニ、四教義ノ中ニ四教ハ三觀ヨリ起リ、三觀ハ反テ四教ニ由テ起ル、其教觀ハ中論ノ因縁所生法、我說即是空、亦名為假名、亦是中道義ノ四句ヨリ起ル、其四句ハ即チ是心トナリテ其本源ハ己心ヨリ出テタリ（三諦、三觀 境心）、即チ一念ノ心ニ十界三千ノ諸法ヲ具シテ感悟ノ当体三諦ノ実相ノ理ナリ、染縁ニ遇テ此理ニ惑ヘハ凡夫トナリ、淨縁ニ遇テ此理ヲ悟レハ佛トナル、佛法高シト雖山巔ニアルニアラス、湛深ナリト雖海底ニアルニモアラス、唯我方寸ノ胸中ニアリ、之ヲ心法妙ト名ク、（傀儡子頭ニ負けたる人怒相衆を出さふと佛出口と）此理ヲ觀スルヲ一心三觀ト曰フ、此教觀二門ノ中、今此四教儀ニハ教相ヲ本トシテ兼テ終リニ觀心ヲ明シテアリ、

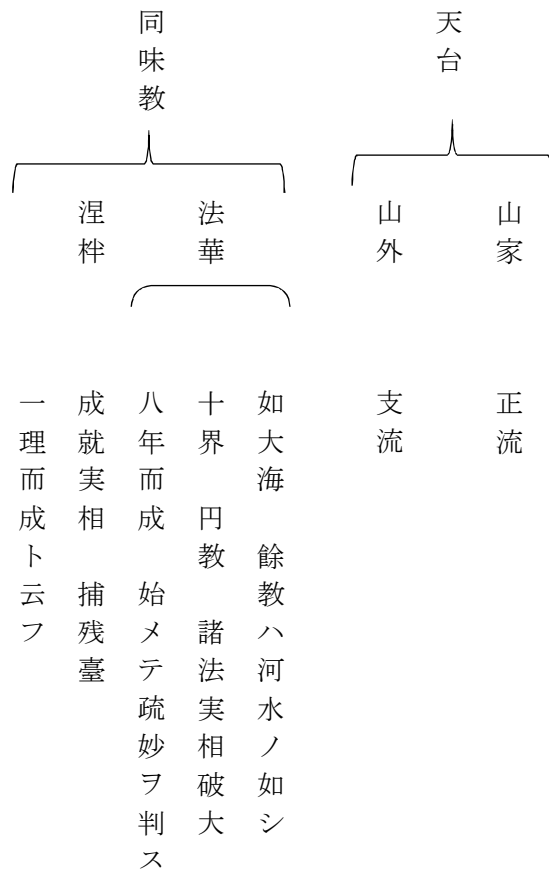
因心本具ハ天台ノ本旨ニシテ、一切法ハ尽ク一心ヨリ生スト立テ、アリ、故ニ佛ハ修性不二トモ云ヘリ、

法華經、涅槃經ハ釈迦ノ晩年所説ナリ、天台ノ五時八教ハ独リ天台ノミナラス、釈迦一代教ノ大意ヲ含蓄ス

## 第二 五時八教

五時八教ノ名目ハ前ノ如シ、此中五時トハ佛ノ説法ノ時分ノ次第ナリ、八教トハ化義ノ四教ト化法ノ四教トナリ、題号ニハ二種ノ四教ヲ合シテ四教儀ト名ク、化儀トハ化物ノ儀式ニテ一大教ノ部類ヲ分判スルコトナリ、化法トハ化物ノ法則ニテ一大教ノ部内ノ法ヲ解釈スルコトナリ、此五時八教ヲ以テ釈迦一代ノ教法ヲ判釈スルガ天台ノ教判ナリ、略シテ二種ノ四教ヲ智ルヘシ、初メニ化法ノ四教トハ、一二三藏教トハ（八丁ヲ）俱舍等ニ明ス小乗教ナリ、二ニ通教トハ三乘ノ因果ヲ明ス、三ニ別教トハ独被菩薩ノ法ヲ明ス、四ニ円教トハ三諦円融ノ法ヲ明ス、以上ノ四ハ所証ノ理ニ浅深ノ別アリテ自カラ此四教ヲナス、次ニ化儀ノ四教トハ上ノ化法ノ四教ヲ衆生ノ機根ニ応シテ説示スルヲ化儀ノ四教ト云フ、（七丁ウ）一二頓教トハ佛成土シテ最初ニ頓大ノ法ヲ説ク、化法ノ四教ノ中、円ニ別ヲ兼タリ、五時ノ中、第一ノ華嚴ノ時ナリ、二ニ漸教トハ上ノ華嚴ハ法門ハ深高ナレトモ二乗ニ於テハ其道ナキカ故ニ、鹿宛、方等、般若、ト浅ヨリ深ニ至リ浅近ノ機ヲ誘引シテ遂ニ一佛乘ニ入ラシム、此漸教ノ中、初中末ノ別アリ、初ノ鹿宛ニハ三藏教ノミヲ説キ、中ノ方等ニハ四教ヲ共説シ、末ノ般若ニハ円ニ通別ヲ帶シテ説ケリ、五時ノ中鹿宛以下ノ三時ナリ、三ニ秘密教トハ（七丁ウ）一会ノ中ニ於テ或ハ此人ノ為ニハ頓ヲ説キ、彼人ノ為ニハ漸ヲ説ク、彼此互ニ相知ラスシテ益ヲ得セシムルコトナリ、四ニ不定教トハ衆生ヲシテ漸説ノ中ニ於テ頓ノ益ヲ得、頓説ノ中ニ於テ漸ノ益ヲ得セシムルコトナリ、然ルニ秘密ト不定ハ共ニ同聴異聞ヲ出テサレトモ、得益ノ上

ニ於テ互ニ不智ト互ニ智ト異アルノミナリ、而モ所説ノ法ハ藏通別円ナリ、五時ノ中前四時ナリ、以上五種ノ四教ヲ以テ余前ノ教ヲ出ス、次ニ第五時ニハ法華、涅槃ヲ説ク、此ハ開顯ノ円ニシテ同時同味ノ教ナリ、（解）天台ニハ凡ソ六十卷アリテ之大別スレハ三大五小部トナルナリ、三大トハ玄義、文句、及ヒ止觀部ナリ、五小トハ觀象疏、文句、金剛明、觀音玄義、同疏ナリ



### 第三 五時名義

五時ノ中、華嚴ト般若ト法華涅槃トハ、教題ニ付テ名ヲ立テ、鹿宛ハ説處ニ付テ名ヲ立テ、方等ハ所説ノ法ニ付テ名ヲ立ルナリ、一二華嚴トハ因位ノ修行ハ花ノ如ク佛果ノ徳ヲ莊嚴スト云フコトニテ、此ノ華嚴

ノ中前分後分ノ不同アリ、六十卷ノ中初メノ四十四卷ヲ前分ノ華嚴ト云フ、佛成土最初三七日ノ説ナリ、次ニ四十五卷ヨリ六十卷マテヲ後分ノ華嚴ト云フ、此ハ後時ノ説ナリ、二ニ鹿宛トハ阿含經ヲ説キタル處ナリ、阿含トハ梵語ニテ此ニ教トモ法歸トモ翻ス、法歸トハ万法ノ歸赴スルトコロナルカ故ナリ、此阿含ノ中、増一ト中ト雜ト長トノ四種アリ、三ニ方等トハ之ヲ釈スルニ三種ノ別アリ、一二事方等、此ハ廣ク藏通別円ノ四教ヲ説テ均ク衆機ニ蒙ル事ナリ、二ニ理方等、此ハ中道ノ理ノ空假ノ二辺ヲ離レテ、衆生ニアリテモ滅セス佛ニアリテモ増セス、無差別平等ナルコトナリ、三ニ行理合論ノ方等、此ハ修行ノ法ヲ方ト云ヒ、所入ノ理ヲ等ト名クルナリ、今ハ第一ノ事方等ナリ、四ニ般若トハ梵語ニシテ此ニ智恵ト翻ス、諸法平等空ノ理ヲ照ス智恵ナリ、此中種々ノ般若アリ、五ニ法華涅槃、此二經ハ同時同味ノ經ナリ、故ニ合シテ第五時トスルナリ、法華トハ悉ニ妙法蓮華經ト云フ、妙法トハ十界十如權実ノ法ナリ、蓮華トハ喻ナリ、下ニ悉ク解アリ、涅槃トハ滅度ト翻ス、生死ノ惑ヲ滅シテ煩惱ノ因ヲ超度スルコトナリ

（五時ノ委細ハ書ニ就而見ルヘシ

（般若ニ六百卷アリ

#### 第四 十界十如

法華ノ題号ノ妙法ニ釈スルニ十界十如權実ノ法トアリ、此ハ妙法ノ体ヲ明スニ三法妙ト云フコトアリ、衆生法、佛法、心法ナリ、此三ニ各十界十如ヲ具セリ、十界トハ六凡四聖ナリ、六凡トハ地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天ナリ、四聖トハ声聞、緣覺、菩薩、佛ナリ、十如トハ相。性。体。力。作。因。緣。果。報。本末究竟等ナリ、此十如是ハ不可言説ノ諸法実相ノ妙理ヲ強テ言ニ顯ハシテ説キタル妙法ナリ、此十界十

如二付、權実ヲ分タハ、十界ノ中前九界ハ法ノ本有ノ理ニ違スルカ故ニ權ナリ、佛界ハ法ノ本有ノ理ニ適  
フカ故ニ実ナリ、之ヲ九權一実ト曰フ、此ノ如ク九權一実ト分ツハ一応ノ配属ナリ、割実スレハ十界互具  
ナルカ故ニ十界各々權実アリ、次ニ十相ハ九界ニ属スレハ權ナリ、佛界ニ約スレハ実ナリ、又互具ノ義ニ  
テ云ハ十界ニ約スルニ各々權実アリ、猶此權実ニハ約部約教等ノ不同アリ、集註卅二丁右ニ出タリ

## 第五 華嚴經（教）主 九丁ヲ

九丁右、廬舍那身トハ華嚴ノ教主ナリ、此ニ付、凡ソ佛ニハ法報応ノ三身ヲ具スル、之ヲ梵語ニテハ法身  
ヲ毘廬遮那ト曰フ、此ニ遍一切處ト訳ス、此ハ真如ノ理ノ煩惱ヲ離レタルノ名ナリ、次ニ報身ヲ廬舍那ト  
曰フ、此ニ光明遍照トモ清滿トモ曰フ、此ハ因行ヲ成就シ諸惡凡テ尽テ衆德ヲ円滿スルノ名ナリ（光明遍  
照トハ他ニ別シテ云ヒ清滿トハ自ニ向テ云フ、之ヲ他自有被身ト云フ）、次ニ応身ヲ釈迦牟尼ト曰フ、此ニ  
能仁寂默ト曰フ、此ハ能ク衆生ヲ憐ミ煩惱等ノ戲論ヲ離レタルノ名ナリ、此中釈迦ノ本体ヲ定ムルトキハ  
丈六ノ応身ナリ、応身トハ衆生ノ機感ニ応シテ出顯スル佛身ナリ、水中ノ月影ノ如シ、然ルニ此佛身ヲ根  
本トシテ四教ノ人各觀智ノ勝劣ニ由テ所見ノ佛身ニ不同アリ、又佛ノ法ヲ説クトキ勝レタル法ヲ説クニハ  
丈六ノ応身ニ即シテ勝レタル佛身ヲ現ス、之ヲ尊特報身ト曰フナリ、故ニ今華嚴ノ教主ヲ廬舍那身ト名ク  
ルハ尊特被身ナリ、

（解）華嚴ヲ頓教ト名クルハ頓初頓直ノ義ナリ、円頓ノ義ニアラス、釈迦涅槃ノ図ニ悲鳴スルハ二乗ノ菩  
薩ナリ、日出而先照平高山 四種照方アリ、十二部經トハ一部經ヲ十二種ノ別ヲ立テ、説クナリ、故ニ新  
訳ニハ十二分經ト曰フ

第六 華嚴擬宣 十三丁ウ

華嚴經ハ五時ノ初ニアリテ小乗ヲ過スシテ、直ニ大乘ヲ説キタリシ故ニ、頓初頓直ノ義ヲ以テ頓教ト名ク、然ルニ華嚴ノ教ヲ説テ以テ擬宣スルトアルハ、佛成土ノ初メ華嚴大教ヲ以テ小乗ノ機ニ擬シテ応不ヲ試ム、然ルニ二乗ノ人ハ智恵浅劣ナルカ故ニ如響如啞更ニ其益ナシ、之ニ付、不審アリ、佛ニハ他心通アリ記心論（三輪アリ）アリテ常ニ衆生ノ機ヲ機鑑セリ、何ソ固ヨリ大乘法ヲ聞クニ堪ヘサル機類ト知リツ、華嚴大教ヲ以テ擬宣スルヤト云フニ、此ハ華嚴大教ヲ以テ擬宣シテ益ナキカ故ニ、鹿宛誘引ノ化道起レリ、此ノ擬宣ハ則チ次ノ鹿宛誘引ノ本ナリ、此レ佛ノ迹門ノ化ヲ垂レテ一切衆生ヲ化道スルノ儀式ナリ、例セハ律ニ佛智テ故ニ問フト云フ如シ

（解）華嚴ハ佛之ヲ三七日ニ説法セリ、

○夫ハ酌ルヤ否ト此レ佛智ヲ殊更ニ問フナリ、蓋シ人ノ驕慢心ヲ戒ムルナリ、世人ハ智ラサル者モ不問ニ過ス弊アリ

○法説、譬説、因果説

○長者偶児之喩 児他日其家ニ乞フ、家ノ従者之ヲ捕レハ其意ヲ智ラスシテ大ニ憤スル、遂ニ家主トナル

第七 二始同時 十五丁ウ

此ハ第一時ニ於テ華嚴頓大ノ法ヲ説クトモ二乗ハ未熟ニシテ耳ニ容ラス、故ニ第二時ニ於テハ浅近ノ法ヲ説テ彼ヲ誘引ス、之ニ付、二始同時寢大施小ト曰フコトアリ、二始同時トハ大乘小乗ノ説法ノ同時ニ始マ

ルコトナリ、其故ハ佛寂場華嚴ノ座ヲ立タスシテ鹿宛ニ遊ヒテ二乗ヲ誘引センカ為メニ阿含ヲ説ク、恰モ一月ノ影万川ニ現スル如シ、一物<sup>(1)</sup>ニ即シテ二物<sup>(2)</sup>トナル、華嚴ノ教主ハ尊特身、阿含ノ教主ハ劣応身ナリ、之ヲ二始同時ト曰フ、次ニ寢大施小ト華嚴頓大ノ化ヲ止メテ、鹿宛ノ漸小ノ化ヲ施スコトナリ、其故ハ佛ノ衆生ヲ化スルニハ利根ハ先ニ教益ヲ受ケ、鈍根ハ後ニ教益ヲ得ルカ故ニ、先大後小ナリ、華嚴ノ三照ノ喩ニ約セハ、日光ハ総シテ同一時ニ照シテ先後ノ念ハナケレトモ、光ヲ受ル方ニハ先後アリ、高山ハ先ナリ、幽谷ハ後ナリ、故ニ今寢大施小ト曰フ、以上二義ノ差別、二始同時ハ妙応無謀ノ佛辺ニ約ス、寢大施小ハ化儀ノ次第ノ機辺ニ約スルナリ

## 第八 十九右 蜜遣二人

十九丁右ニ、第二時鹿宛ノ説ヲ了解セシ文ニ以方便遣二人トアリ、此蜜遣二人ヲ釈スルニ、華嚴ノ即遣旁人ニ対辦シテ理教人ノ三種アリ、華嚴ハ理教人皆一ニシテ無差別ナリ、鹿宛ハ差別ニシテ一ニアラス、其赴ハ理ニ約セハ華嚴ニハ一実諦ト云ル、中道一実ノ理ヲ顕ハス、十界ノ依正色心ノ諸法ハ皆中道本具ノ理ノ為ストコロナレハ、諸法融即シテ絶対ナルヲ中道一実諦ト云フ、鹿宛ノ説ハ有作ノ二諦ニテ真諦ノ空理ト俗諦諸法ト差別セリ、小乘真諦ノ理ハ、偏真ノ空理ニシテ道諦ノ智慧ヲ以テ煩惱ヲ談<sup>(3)</sup>シテ顕ハス、又俗諦ノ事ハ惑業ヨリ生セシ法ナリ、此ノ如ク事理共ニ人ノ所作ニ由アル故ニ、有作ノ真俗ト云テ二人ニ喩ルナリ、次ニ教ニ約セハ華嚴ハ一大乗教ニシテ円満修多羅ト云フ、鹿宛ハ偏小ノ教ナリ、次ニ人ニ約セハ華嚴ハ一菩薩人ニテ四菩薩ニ代説セシム、四菩薩ノ代説ニ一菩薩ヲ云フハ如何ト云フニ、大乘ノ人ハ平等無差別ナルカ故ニ人数ノ多少ニ係ハラス一菩薩ト云フ、鹿宛ハ声聞ト縁覺ト二類判然ト差別セリ、以上



理教人ノ三宝ノ相對ヲ以テ蜜遣二人ノ赴ヲ智ルヘシ

(解) 蜜トハ華嚴ヲ治メテ送トハ鹿宛ヲ説クコトナリ、今日ノセーロンニハ只小乗教ノミ伝ハレリ

## 第九 弾偏折小

二十丁右、方等ノ部意ヲ明スル文ニ弾偏折小歎大褒円トアリ、此八字ニ二対アリ、偏円相對ト大小相對トナリ、中ニ於テ大小相對ノ時ハ藏教ノ小執ヲ折挫シテ後三大乗ヲ称歎ス、此ヲ大小相對ノ彈訶ト云ナリ、前ノ鹿宛ノ時、二乗ノ機根ニ応シテ淺近ノ法ヲ説テ随分ノ利益ヲ与ヘタレトモ、進テ大乘ニ入ラシメンカ為メニ、方等經ヲ説テ二乗ヲ彈訶セリ、次ニ偏円相對ノトキハ、藏通別ノ偏教ヲ彈斥シテ円教ノ徳ヲ褒美ス、之ヲ偏円相對ノ彈訶ト云ナリ、前三教ヲ偏ト云フハ、事理因果ノ円融相即ヲ談セサルカ故ナリ、次ニ此方等部ノ内ニハ四教共説ト云フコトアリ、方等ヲ対教ト名クル之ナリ、此対教ト云ニ付、対破対説ノ二義アリ、以大斥小トハ対破ノ義ニテ方等部ノ正意ナリ、逗大逗小トハ対説ノ義ニテ方等部ノ旁意ナリ、此方等ノ会座ニハ大小乗機類共ニアルカ故ニ、其機ニ応センカ為メニ四教ヲ共説スルナリ、如此対破対説ノ二義アルユヘンハ、方等ノ座ニ列スル小機ニ二類アリ、一二豎入ノ機、此ハ鹿宛ノ時ニ小果ヲ得テ方等ニ移ル人ナリ、此者ノ為メニ大乘ヲ以テ小乗ヲ対破ス、二ニ横来ノ機、此ハ鹿宛ヲ過スシテ方等ノ時始メテ来ル新受小ノ機ナリ、此者ノ為メニ四教ヲ対<sup>(4)</sup>説スルナリ

## 第十 蜜成通益

二十一右ニ、方等ノ利益ヲ述ヘテ二乗ノ人ヲシテ、蜜ニ通益ヲ成セシムトアリ、此ハ藏教ノ人ガ直ニ通教ノ人トナルコトニアラス、方等ノ時ニ乗ノ人恥小慕大ノ心ヲ起スハ、法華ニ至リテ一実ニ入ルノ本ナレハ、大乘ノ初門ト云ハル、通教ノ利益ニ均キコトヲ示ス、之ヲ冥成通人トモ曰ナリ、此ハ只機熟ノ分齋ヲ判スルノミニシテ通教修証ノ人トナルニアラス、固ト此通教所談ノ真理ハ含中ト曰テ、如幻即空ノ偏真ノ理ニ中道不空ノ理ヲ含テアリ、故ニ此通教ヨリ遠ク中道ノ理ニ通入スル故ニ、通教ヲ大乘ノ初門ト云フ、今蜜成通益トハ大乘ノ初門ニ向タコトナリ、之レニ乗ノ人方等ノ彈訶ニ遇テ、恥小慕大ノ実機内ニ動クハ通教ノ益ニ均キナリ、蜜成トハ二乗ノ自己ノ心ニモ其機ノ内ニ熟スルヲ智ラス、他人モ亦智ラサルガ故ナリ、之ヲ智ルハ只佛ノミナリ

（解）方等時ニハ大小乗ノ別ヲ見、般若ニハ大小無差別ナリ、法華ニハ人法共無差別ナリ

## 第十一 轉教融通

二十三右、般若ノ部意ヲ明スニ、轉教付財融通陶<sup>(5)</sup>汰トアリ、轉教トハ般若ノ時ニテ佛自ラ説クヘキトコロヲ須菩提等ニ渡シテ、他方来ノ菩薩ノ為メニ般若ノ法門ヲ説カシムルコトナリ、付財トハ喩ニテ長者ノ家財ヲ窮子ニ委付スルコトナリ、佛ノ心ニテハ大乘ノ法財ヲ二乗ニ譲渡ス心ナリ、次ニ融通トハ前ノ方等ノ時ハ四教ヲ共説スルカ故ニ、大小法門ヲ極別ナリト思ヘリ、今般若ニ来リテハ一切法皆摩訶衍ナリト大小ノ法門ヲ融通ス、人ハ大小不同ナレトモ法ハ大小無別ト説ク、次ニ陶<sup>(6)</sup>汰ノ喩ニテ物ノ汗ヲ洗除スル

コトナリ、即チ般若空恵ノ水ヲ以テ、大小ノ法門隔別セリト思込タル執情ヲ洗除スルコトナリ、之ヲ般若ノ法ノ開會ト名ク、然ルニ人ノ開會ハ法華ニアリ、般若ノ時ハ二乗ノ人、口ニ菩薩ノ為ニ大乘ノ法門ヲ説ケトモ、心ノ内ニハ大乘ハ菩薩ノ法ナリト心得テ、自身ニハ分ナシト思フ故ニ、大乘ノ法ヲ修業スル念ナシ、之レ尚ホ大小ノ人ヲ隔ルカ故ナリ

## 十二義 四教二理

二十五丁右ニ般若ニ明ストコロノ真理ハ、通別ノ二ヲ出デスト云ニ付、藏通別円ノ四教ハ二理ニ歸スルコトヲ智ルヘシ、二理トハ空理ト中道ノ理ナリ、此二理ヲ四教ト配セハ藏通二教ハ空理ナリ、別円二教ハ中道ノ理ナリ、其故ハ藏通二教ハ界内ノ教ニテ、界内ノ利鈍ノ機ニ對シテ空理ヲ教ユルニ巧拙ノ別アリ、鈍根ノ機ニ事理隔別シテ教ユルカ藏教ナリ、理根ノ機ニ事理相即シテ教ユルカ通教ナリ、如此能詮ノ方ニ巧拙ノ別アリテ藏通二教ト別ルレトモ所詮ノ空理ハ一ナリ、次ニ別円二教ハ界外ノ教ニテ、界外ノ利鈍ノ機ニ對シテ中道ノ利教ユルニ巧拙ノ別アリ、理鈍ノ機ニ事理隔別シテ教ユルカ別教ナリ、利根ノ機ニ事理相即シテ教ユルカ円教ナリ、此ノ如ク能詮ノ方ニ巧拙ノ別アリテ別円二教ト別レトモ、所詮ノ中道ノ理ハ一ナリ、故ニ能詮ノ境ヨリ云ハ四教ナレトモ、所詮ノ理ヨリ云ハ空中ノ二理ナリ

## 十三義廿九ウ 秘蜜不定

化儀ノ四教ノ中前來明セシ頓漸ノ二教ハ顯露定教ナリ、大小頓漸各々其機ニ応シテ法ヲ授ケ得益定マルカ

故ナリ、二十六左以下ニ明ス、秘密不定ノ二教ハ前ト異ナリ、上ノ顕露定教ニ泄レタル者ノ為メニ別ノ化儀ヲ施ス容ニテ此二教合シテ不定教ナリ、故ニ具ニ云ヘハ第三ハ秘密不定教ナリ、第四ハ顕露不定教ナリ、此教ノ差別ハ如何ト言フニ孰レモ同聴異聞ト云テ、維摩經ノ佛以一音演法衆生從類各得解ノ如ク、同一ノ法ヲ聞キナカラ、頓機ハ頓教ト聞キ漸機ハ漸教ト聞ハ同シケレトモ、彼此人ノ得益不同ナルコトヲ互ニ相智ラサルヲ秘密教ト云ヒ、互ニ相智ルヲ不定教ト名クルナリ

#### 第十四義 置毒發毒

三十丁ノ右、不定教ノ相ヲ明スニ、涅槃經ノ置毒發毒ヲ例ニ引ケリ、此ハ正シキ不定教ニハアラス、不定教ノ義類ナリ、此置毒發毒トハ喩ニテ、毒藥ヲ乳中ニ入レオケハ、其乳ガ漸々轉シテ終ニ醍醐味トナル、然ルニ其人ノ不同ニ由テ乳味ノ時ニ毒ヲ發シテ死スルアリ、乃至醍醐味ノ時ニ毒ヲ發シテ死スルアリ、今置毒トハ、過去ニ於テ中道実相ノ理ヲ説ク円実ノ教ヲ聞クニ喩フ、人ヲ殺ストハ無明ヲ破スルニ喩フ、円実ノ教ハ無明ノ人ヲ殺ス毒藥ナリ、發毒トハ今世ニ釈迦ノ出世ニ遇テ一代五味ノ教ヲ開ク中ニ、其過去ノ円実ノ教ヲ聞シ毒力發シテ無明ヲ破スルナリ、然ルニ其毒ノ發スル時節ハ定マラス、其毒力華嚴ノ乳味ノ時ニ發シテ無明ヲ破スルヲ乳中殺人ト曰フ、若シ其毒ガ鹿宛ノ酪味ノ時ニ發シテ無明ヲ破スルヲ酪中殺人ト曰フ、生蘇、熟蘇、醍醐順シテ智ルヘシ、此ノ如ク今世五味ノ中、円聞ノ毒ヲ發スルコト不定ナルカ故ニ、之ヲ毒發不定ト曰フ

第十五 三十一ヲ 八教撰不

三十一右ニ、顯<sub>下</sub>法華超ニ八教外一<sub>出</sub>ニ四時表<sub>上</sub>トアリ、相待妙ノ心ニテ法華ノ開顯ノ円ハ、余前ノ四時八教ニ超勝シタル超八ノ極円ト曰フ、此ニ付、此開顯ノ円ハ八教ノ中ニ撰スルヤ否ヤト曰ニ、約教別与約部通奪ノ両義アリ、若シ教ニ約シテ与ヘテ言ヘハ、法華ノ円ハ八教ノ中ノ円教ニ撰ス、今円昔円円体無殊ナルカ故ナリ、若シ部ニ約シテ奪テ言ヘ、法華ノ円ハ八教ノ中ニ撰スヘカラス、超八醍醐ノ極円ナルカ故ナリ、併シ乍ラ超八ノ極円トイヘハトテ、八教ノ外ニ円教ノ別体アルニ非ス、前ノ八教ヲ開会シテ一ノ円教トナリシ所カ法華ノ円教ナリ、彼ノ八教ノ円ハ純円ニ非レハナリ、是ニ義ノ中部ニ訳シテ奪フ義ヲ以テ本義トスルナリ、是ニ義ハ此書三十五丁ニ出ル、其本ハ文句ノ記ニ仏教不出於人所詮無外トアリ、是ハ与ヘテ撰スル義ナリ、又同ク若非超八ノ如ク是安為此經之所聞トアリ、之ハ奪ヲ撰セサル義ナリ、此両重ノ義ハ二百題十五卷ニ論シテアリ

(解) 四教ノ上々半ト下々半トハ骨髓ナリ

第十六 三十一ウ 沙門

之レハ、法華開顯ヲ明スニ迹門ノ三喻、本門ノ三喻ト云フコトナリ、之レハ原ト元<sup>(7)</sup>義ノ始メニ出ルコトニシテ、妙法ハ權実一体ニシテ解シ難キカ故ニ、經題ニ蓮華ヲ出ス、即チ是蓮華ヲ以テ北<sup>(8)</sup>華所説ノ本迹二門ヲ顯ス、一部廿八品ノ中、迹門ノ十四品ハ施開廢ノ三喻ヲ旨トシ、本門ノ十四品ハ垂開廢ノ三喻ニ歸スルナリ、蓮ハ実ト本トニ喻ヘ、華ハ權ト迹トニ喻フルナリ、暫ラク沙門ノ三喻ノ中、初二為實施權

トハ、後ニ一実ニ入ラシメンカ為ニ、暫ラク随情ノ權化ヲ施コスコトニテ、是ハ昔ノ教ノ方便ヲ解キタルイワレナリ、之ハ今ノ法華ヲ以テ昔教ヲ判ス昔教ノ上ニテハ知り難キコトナリ、方便品ニ知第一寂滅以方便力故雖示種々道其実為仏乗トアル、是ナリ、次ニ開權顯実廢權立実トハ、今ノ經ノ部旨ニ約ス、開廢ハ北<sup>(9)</sup>華ノ旨トスル所ナリ、開權顯実トハ開トハ除ト云フ心、取除ク心ナリ、三乗ノ因果格別スト思フ執權ノ情ヲ除テ一実ニ入ラシムルコトニテ、法師品ニ開方便門示真實相トアリ、廢權立実トハ權施ノ化用ヲ亡シテ一実ニ歸スルコトニテ、昔ノ權教ノ物体力轉シテ実教トナリ終リタルコトナリ、釈籤ニ開已供実無以權可論義當於廢トアルハ、氷力解テ水トナルカ如シ、方便門ニ正直捨方便但說無上道トアル之レナリ

#### 第十七義 本門三喻 三十一ウ

法華ノ開顯ヲ明スニ本門ノ三喻トハ、初メニ從本垂迹、此ハ釈迦ノ本門五百塵点劫ノ久遠実成ノ本地ヲ顯サンカ為ニ、本門ヨリ迹門ノ八相成道ノ化ヲ垂ル、コトナリ、壽量品ニ我実成仏以來久遠但以方便教化衆生作如是説我少出家得三菩提トアル之ナリ、次ニ開迹顯本。廢迹立本此ニハ正シク本門ニ約ス、開迹顯本トハ迦耶<sup>(10)</sup>始成ノ近謂ヲ除テ久遠実成ノ本門ヲ顯スコトニテ、壽量品ニ一切世間皆謂今始得道我成仏來無量無辺耶由他劫トアル之ナリ、次ノ廢迹立本トハ、迦耶<sup>(11)</sup>ノ垂化ヲ亡シテ本地ノ実ニ歸スルコトニテ、壽量品ニ諸佛如来法皆如是為渡衆生皆実不虛トアル之ナリ、以上迹本三喻ノ中、沙門ノ三喻ハ所化ノ教益窮極シタル相ナリ、本門ノ三喻ハ能化ノ顯実窮極シタル相ナリ、猶此本迹ニ門ニ付、沙門ノ十妙本門ノ十妙ト云フコトアリ、之ヲ本迹二重ノ十妙ト曰フ、玄義二卷ニ釈アリ

十八 權実同体

三十二右ニ明ストコロノ開權顕実ハ法華一部ノ主眼ナリ、然ルニ此權ト実トハ同体ナルヤ異体ナリヤト云フコトヲ智ルヘシ、同体ノ權実トハ、前三教ノ權ト円教ノ実ト一体ニシテ隔テナク、佛意ヨリ云ハ於佛乘分別説三ト説ク、一佛乘ノ理ヲ三乗ト説タル者故ニ、權実平同<sup>(12)</sup>ニテ同体ナリ、恰モ水波ノ同体ナル如シ、異体ノ權実トハ、三教ノ權ト円教ノ実トヲ隔テ、各々修証ヲ異ニス、此レ隨情ノ化用ヨリ云ヘハ權実ノ別アリ、今開權顕実ト云ハ、同体ノ權ヲ開スルカ異体ノ權ヲ開スルカト云フニ、此両義一致ニ歸スル、若シ機情ニ約スレハ異体ノ權ヲ開スト云フヘシ、佛意ニ約スレハ固ヨリ同体ノ權ナリ、故ニ同体ノ權ナレトモ衆生ノ隔情ニ由テ異体ニナリテアル故ニ開スルナリ、此義ヲ審スルニ付、集註ノ義門ヲ分テリ、即チ所開ノ法体ト能開ノ妙ト佛意ノ辺トノ三ニ約スレハ權実同体ナリ、所開ノ法体トハ、別教ノ菩薩ノ法ヨリ人天ノ小善ニ至ルマテ、法已本妙ニシテ隔異ナシ、次ニ能開ノ妙トハ今ノ經ノ開顯ナリ、如来一期ノ化道終極シテ、權実ノ別ナキコトヲ明スカ法華ノ能開ノ妙ナリ、次ニ佛意ノ辺トハ、權引歸実ノ佛意ニ約スレハ固ヨリ權実一体ナリ、此三義ニ約スレハ開スルニ及ハス、次ニ所開ノ機情ニ約スレハ異体ヲ開スルニ當ル、機情トハ所開ノ法体ヲ掩テアル、權実隔異ノ情謂ナリ、此機情ヲ開スレハ權実同体ノ本ニ復スルナリ

十九 待絶二妙

三十二右ニ明スカ如ク、法華ノ妙ヲ談スルニ、相待妙、絶待妙ト云フコトアリ、此二妙ハ今ノ經ノ化意ヲ明ストコロニ具スル義分ニシテ、共ニ權実一体ノ上ヨリ云ハ、妙体無殊ニシテ<sup>二</sup>妙ヲ具足スルコト

ヲ智ルヘシ、此ハ相待論判、絶對論開ト云テ、相待妙ト云ハ麤妙ヲ判スルコトニテ、爾前ノ麤ト法華ノ妙ト今昔隔會ノ化用ノ異ナルコトヲ判別スル方ナリ、昔教ニ於テハ八教ノ差別アリ、權實ノ不同アリシハ麤ナリ、今一佛乘ニ會入シテ權實ノ化用ニ別ナキトコロヲ妙ト曰フ、如此今昔隔會ノ異アルコトヲ論スレハ、今ノ法華ハ前三教四時ノ上ニ超出セリト顯ハスカ相待妙ナリ、次ニ絶待妙トハ麤妙ヲ開スルコトニテ、爾前ノ前三教四時ノ上ニ蔽テアル隔情ヲ除テ、教法ノ体別ナキコトヲ顯ハス法ナリ、隔會ハ根性ノ融不融ニ由ル物ヲ隔ル情ヲ除ケハ、爾前ノ差別ノ法力一味ノ円妙ノ法トナリ、如此麤則妙ト開シ終レハ相對スヘキ者更ニナシ、之ヲ絶待妙ト云ナリ、然レハ相待妙ハ隔會ノ不同ヲ顯シテ今昔ノ化ヲ別チ、絶待妙ハ法ノ無別ヲ顯シテ今昔ノ法ヲ會スルナリト智ルヘシ

第廿 三十二丁ウ四行 開廢俱時

三十二ウニ、開ト廢トノ別ヲ明スニ約法、約理、約喻ノ三ヲ分テアリ、約法トハ法華ノ上ニ直ニ開會ノ法門ヲ説キタルトコロニテ、經文ニ唯一乘法無二亦無三ト説クカ如シ、唯一乘法トハ開ナリ、無二亦無三トハ廢ナリ、是レ唯一乘法ト開スルトキ直ニ無二亦無三ト廢スルナリ、約喻トハ、華嚴ノ喻ニ約セハ花開ハ前ナリ、花落ハ後ナリ、約理ハ法門ノ道理ノ事ニテ、言ニ述ルトキハ方便即真實ト曰フ如ク、前後ノ次第アレトモ開會ノ法門ノ道理ニ約セハ開廢俱時ナリ、其謂ヲ次ニ陳ヘテ開時已廢故トアリ、權即實ト開會スルトキ直ニ權ハ廢セラレテアル、此レ開會スルトキニハ權直ニ實トナレハ權ト云フヘキ物体ハ亡スル故ニ、開廢俱時ナリ、廢トハ其物体ヲ外ニ出スニハアラス、融會スルコトナリ、譬ヘハ水ノ凝結シタルトキハ水ト氷ト別体ナルニ似タレトモ、氷力融ケ水トナリタルトコロニテハ氷ノ体ヲ亡スルノミ、權教轉



シテ実教トナリタルトコロニテハ、權教ノ体ヲ混スルナリ、其義辺ニテハ權教ノ体ヲ廢シタルニ当ル、權教ノ外ニ実教ノ体アルニアラサルナリ、

(解) 因心本具トハ天台ノ本旨、俱舍ノ法体恒有モ此意アリ、法華ニハ權実同体ト云フ

## 廿一 權実今昔

三十三ヲニ、權実ノ名ハ今昔ニ通スレトモ、爾前ノ昔教ト今ノ法華トハ權実ノ義理モ意趣モ不同ナルコトヲ明ス、之ニ付、名ト義ト意トノ三重アリ、初メニ名トハ權実ノ名称ナリ、此權実ノ名ハ今昔ニ通ス、昔ニ通ストハ華嚴ハ一權一実、方等ハ三權一実ト云フ如シ、今ニ通ストハ為實施權開權顯實ト云フ如シ、次に義トハ所詮ノ義ニテ權実ノ名ニ顯サルゝ法体ナリ、即チ昔教ニアリテハ權トハ前三教ナリ、実トハ円教ナリ、今ノ經ニ来リテハ諸法実相トナレハ權ト限ルヘキ法ナシ、固ヨリ前三教モ法華ニ来リテハ一円実ノ法トナル、然レハ法華ノ上ニテハ何ヲ權ト名ルナレハ、昔衆生ノ根性ノ格別ナル間ハ、各修証ヲ異ニシテ隔ノアリシヲ權ト曰フ、今衆生ノ根性カ一味ニナリテ、均ク一佛場<sup>13</sup>ニ會入スルヲ実ト云フ、勿論十界ハ孰レモ法ノ本有ナレハ隔ノアル理ナシ、然ルニ法ノ本有ニ背テ隔ノツクヲ權ト曰フ、法ノ本有ニ叶テ隔ノツカヌヲ実ト云ナリ、次ニ意トハ意赴ト熟語シテ、義ノ赴クトコロヲ意ト云フ、昔教ニアリテハ權実格別ニシテ修証ヲ異ニス權実異体ナルカ故ナリ、恰モ河線ヲ隔テ流ルゝ水ノ如シ、今ノ經ハ權皆実ニ赴ク權実同体ナルカ故ナリ、喩ヘハ衆水ノ大海ニ入ル如シ、如此權実ノ義ノ赴クトコロヲ意ト云ナリ

廿二 別与通奪 三十五ヲ三

三十四ウニ、昔部ヲ開テ今ノ妙ヲ成スルニ付、約教別与約部通奪ノ二途アリ、約教別与トハ偏麤ヲ開テ妙ヲ成スル義ニテ、開會ヲ用ユルハ四教ノ中、前三教ノミ、昔部ノ円教ハ法華ノ円ト同シク、之ヨリ円融スル故ニ開會スルニ及ハスト云フ、之レ円体ニ約スル義ニテ今円昔円二円不別ナリ、之ヲ約教別与ト曰フ、次ニ約部通奪トハ、昔ノ円ヲ開シテ妙ヲ成スル義ニテ、五時ノ中昔部ノ円教ハ藏通別ノ偏教ヲ隔ル故ニ、共ニ麤ノ部ニ属シテ開會ヲ用ユルト云フ、此レ円用ニ約スル義ニテ、爾前ノ円教ハ帶權ノ円、法華ノ円ハ開顯ノ円ナリ、之ヲ約部通奪ト云フナリ

廿三 教行人理

三十六右、法華ノ純円獨妙ノ相ヲ明スニ、經ノ四一ノ文ヲ引ケリ、此四文ハ方便門ノ說ニテ、之ヲ教行人理ノ四一ト名ク、此一トハ数ノ一ニハアラス絶待ノ一ニテ、一切法一妙法ト隔ノ泯シタルコロナリ、故ニ一ハ則チ妙ナリト釈ス、之レ爾前ノ教行人理ノ隔歷スルニ扱フ心ナリ、初ノ教一ノ文ハ一切皆成佛ノ円教ハ真実ニシテ、二乗三乗ハ方便ナルコトヲ示ス、次ニ行一ノ文ハ、修行ニ三乗五乗ノ別ヲ見ス、唯正直ノ一道ナルコトヲ示ス、次ニ人一ノ文ハ、昔三乗ノ人ヲ教化ストハ方便ナリ、今十界ノ均ク一佛乘ニ會入スルトキハ、同一ノ菩薩人ノミナルコトヲ示ス、次ニ理一ノ文ハ、十界ノ依正隔歷差別ノ当相即チ常住不變ノ本有ノ理性ナレトモ、迷情ヲ以テ見レハ諸法生滅遷流セリ、若シ悟理ノ智見ニ約スレハ、諸相即チ常住ナルコトヲ示ス、所謂花ハサキク常住、紅葉ハチリチク常住ト之ナリ

#### 廿四 二經同異

三十八右、涅槃經ニハ摩訶般若ヨリ涅槃ヲ出ストアリ、然ルニ今般若ヨリ法華ヲ出スト云フハ如何ト云フニ、二經共ニ同醍醐味ノ義ニ約シテ、法華ヲ醍醐味ニ喩ヘテ、般若ヨリ法華ヲ出スト云ナリ、之ニ付、法華ト涅槃ノ二經同異ヲ智ルヘシ、略シテ三同二異アリ、三同トハ一ニ時同、此ハ法華涅槃共八年、二ニ味同、此ハ二經同味ニテ法華ニハ諸法実相ヲ大王勝ト名ク、涅槃ニハ常住佛性ヲ醍醐味ト説ク、三ニ開顯同、法華ハ前番ノ開顯、涅槃ハ後番ノ開顯、前後ノ別ハアレトモ其義一ナリ、次ニ二異トハ二經待對スルニ二個ノ勝劣アリ、一ニ有心無心相待、有心ハ治シヤスク、無心ハ治シガタシ、法華ノ功用ハ無心ノ二乗ヲ會シテ成佛セシムルニアリ、此無心ノ二乗ハ灰身滅智シテ無心ニナル、其病ヲ治スル甚タカタシ、又涅槃ノ功用ハ有心ノ一闡提ヲ治シテ成佛セシムルニアリ、此闡提ノ人ハ善根ハ斷スレトモ身心都滅スルコトナシ、故ニ無心ノ病ヨリモ治シヤスシ、二ニ大陣殘薰相待、法華ノ開顯ハ大陣ヲ破ル如ク、涅槃ノ時ニ常住佛性ノ理ヲ瞭智セシムルハ殘薰ヲ捕ル如シ、已ニ法華ノ中ニ十界成佛ノ旗ヲ揚テ、大陣破リシ力ニ由リ涅槃ノ中ニ闡提ノ殘党ヲ捕ヘテ成佛セシムルナリ、此三同二実ノ中、今ノ一段ニハ一同一実ヲ揚ル者ナリ、ツマルトコロ部旨ニ付テ論スレハ、二種同意ナリ、法華ハ諸乗ヲ一佛果ニ會ス、涅槃ハ一切衆生尽有佛性ノ理ヲ示ス、功用ニ約スレハ前番ノ開顯ハ勝ナリ、後番ノ開顯ハ劣ナリ

#### 廿五 開示悟入

三十九左、方便開示悟入佛之智見ヲ釈スル文ヲ引ケリ、此開示悟入トハ、開トハ開發ノ義ニテ、今マテ隱

レテアリシ者ノ顯レ出タルコトナリ、則チ無明ノ惑ヲ發<sup>(14)</sup>シテ本具ノ佛智見ノ發開<sup>(15)</sup>シテ、実相ノ妙理ノ、本来萬徳ヲ具ヘテ三千ノ妙理ノ法界ニ遍滿シテ、衆生ノ機ニ応シテ自在ニ利益スル化他ノ徳ヲ開示スルコトナリ、喩ヘハ明鏡ノ中ニ萬像ヲ現スルカ如シ、次ニ悟トハ法ノ本有ニ合テ悟リ、事理融通シテ更ニ二赴ナキコトナリ、事理トハ理具ノ三千事用ノ三千ニテ、本具ノ辺ヨリ云ハ理ナリ、隨縁ノ辺ヨリ云ハ事ナリ、此事理融即シテ待對ヲ絶シタルトコロガ、法ノ本有ニ叶テ悟リタルトコロナリ、喩ヘハ鏡面ノ空ト鏡相ノ仮ト非一非異ナルカ如シ、次ニ入トハ、已ニ事理融通シテ自在ナレハ、任運ニ薩婆若海ヘ流入スルナリ、薩婆若海トハ妙覺円滿ノ智慧海ナリ、此開示悟入ヲ、文句ニ四位ト四智ト四門ト觀心トニ約シテ釈ス、之ヲ位智門觀ト云ナリ、集註ニ付テ見ルヘシ

## 廿六 位智門觀

三十九左、開示悟入ヲ釈スルニ、位智門觀ノ四意アリ、一ニ四位トハ、一二十住ノ位ナリ、無明ヲ破シ如来藏ヲ開キ実相ノ理ヲ見ル、二二十行ノ位、惑障已ニ除テ智見ノ体顯示スルコト分明ナリ、三二十廻向ノ位、事理融即シテ自在無礙ナリ、四二十地ノ位ニハ中道ノ理ニ悟入スルナリ、二ニ四智トハ、一二道恵トハ道ノ実性ヲ見ル、則チ佛智見ヲ開クナリ、二ニ道種恵トハ十界諸道ノ種智解惑ノ相ヲ智ル、乃チ佛ノ智見ヲ示スナリ、三ニ一切智トハ一切法ノ一相寂滅ヲ智ル、乃チ佛ノ智見ヲ悟ルナリ、四ニ一切種智トハ種々ノ行類相貌ヲ智ル、即チ佛ノ智見ニ入ルナリ、三ニ四門トハ、一ニ空門々々トハ一空一切空、即チ佛智見ヲ開ク、二ニ有門トハ一切空即佛ノ智見ヲ示ス、三ニ亦空亦有トハ一切亦空亦有、即チ佛智見ヲ悟ル、四ニ非有非空門トハ一切朋空朋有、即チ佛智見ニ入ルナリ、四ニ觀心トハ空假中ノ三諦ノ理ヲ觀スルニ、

觀心明淨ナルヲ開ト云ヒ、空假中ノ心ヲ分別スルニ、宛然トシテ濫ナキヲ示ト云ヒ、空假中ノ心空假中ニアラスシテ、均シク空假中ヲ輝スヲ入ト云フナリ、此四位ノ中、位智ノ二ハ聖者ニ限り、門觀ノ二ハ凡夫ニモ通スルナリ

## 廿七 仏性名義

四十丁右、第五時ノ中法華ノ中ニ涅槃經ヲ引ケリ、此經ニハ常住仏性ノ理ヲ説ク、乃チ經文ニ一切衆生悉有仏性トアリ、佛性トハ一切衆生ニ本来具スルコロノ真理ナリ、之ヲ仏性ト名クルハ仏トハ果人ノ名ナリ、性トハ種子因本ノ義ニテ、一切衆生ニ皆果人ノ性ヲ有スルカ故ニ、衆生本具ノ如来藏性ナリ、大覺ノ妙果ヲ出生ス、此レ仏果ニ至ルヘキ種子ナリ、此佛性ハ迷悟因果ノ位異ナレトモ、不増不減ナル者ナリ、然ルニ一切衆生ハ仏性ヲ具スレトモ、之ヲ開覺スルコト甚タ難シ、仮令ハ鉉山ヨリ発掘セハ璞玉ハ更ニ光珠ナシ、良工アリテ之ヲ研磨スレハ美玉トナル如シ、一切衆生本来仏性ヲ具スレトモ、修治セサレハ光明相好好等ノ作用顯現セス、故ニ因行ヲ修習シテ無偏智ヲ発得シ、本具ノ仏性ヲ發顯スルヲ以テ、仏果ヲ証得スト名ク、此佛性ノ煩惱ノ中ニ隠レタルヲ如来藏ト云ヒ、顯ハレタルヲ法身ト云フナリ、此ニ付、生了縁ノ三因仏性ト云フコトアリ、後ニ至リテ知ルヘシ

## 廿八義 涅槃二義

四十丁左、涅槃經ヲ説クニ二義アルコトヲ示ス、初義ハ常住ノ涅槃ト曰ク、常住仏性ノ理ヲ説ク故ナリ、

後義ハ贖命ノ涅槃ト云フ、末代ニ至レハ仏弟子ノ中ニ惡見ヲ起ス者アリ、仏モ涅槃ニ入ルカラニハ無常ナリト執シテ、斷滅ノ見ヲ起シ戒ヲ破リ修業ヲ廢シテ、遂ニ法身常住ノ命ヲ失フ、故ニ佛ノ其末代ノ惡見ヲ對治シテ、常住ノ命ヲ贖フ用意ノ為メニ説キ玉フカ、贖命ノ涅槃ナリ、此ニ義ノ中、初義ハ当座ノ機ノ為ナリ、後義ハ末代ノ機ノ為ナリ、後義ノ下ニ鈍根トアルハ二類ノ鈍根アリ、一類ノ物ハ如来ノ無常ナリト執シテ斷滅ノ見ヲ起ス、又一類ノ物ハ円教一実ノ理ヲ惡シク執シテ方便ヲ嘲ル、此業<sup>(16)</sup>ハ一実ノ理性ノミ尊シテ戒定恵ノ事業ヲ廢シテ、中道ノ智恵ノ命ヲ敗<sup>(17)</sup>リテ本具ノ法身ノ体ヲ失フ者ナリ、此等ノ鈍根ノ為メニ贖命ノ涅槃ヲ説ク

#### 迄○廿九義 相生濃淡

四十四右、前來所明セシコロノ五味ヲ以テ五時ノ教ニ對配スルニ、二種ノ次第アルコトヲ示ス、此中相生ノ次第ハ衆生ノ根機ノ熟スル浅深ヲ示ス、此ハ約教相生約機濃淡ト云フガ決着ノ五味ナリ、然ルニ集註ニ約教相生約機濃淡ハ一応ノ義ニ刻実スレハ、約教約機孰レモ相生濃淡ノ二義ヲ具スルト云フハ穩ナラス、教ニ約シテ相生ヲ論スト云ハ、牛ヨリ次第ニ牛酪等ヲ出ス如ク、佛ヨリ華嚴鹿宛等ト次第ニ相生スルナリ、次ニ機ニ約シテ濃淡ヲ論ストハ、教益ヲ受ル機ノ方ヨリ云ハ、華嚴ノ時ニハ更ニ其益ナク、鹿宛以後漸々ニ其益勝レタリ、乳酪等ト次第味ノ細カナル如シ、而ルニ委サニ五時ヲ過ルハ、最鈍根ノ者ニテ法華悟入ノ人ナリ、中根ハ一二三四味ヲ過テ不定ナリ、最上根ノ者ハ五時ノ中孰レヲ受テモ法界実相ニ悟入ス、法華ノ開會ヲ待タサルナリ

三十義 通別五味

四十七右、五時ニ通別五時アルコトヲ明ス、別ノ五時トハ頓漸等ノ五時ノ年月前後ノ次第アリテ、華嚴ノ時ニ擬宜シテ鹿宛ノ時ニ誘引シ、方等ノ時ニ彈訶シ、般若ノ時ニ淘汰シ終リ、法華一乘ニ入ラシムルナリ、通ノ五時トハ始ノ華嚴後ニ通シ、後ノ涅槃始メニ通シテ、年月前後ノ次第ナク、華嚴有縁ノ機カ聞クトキハ、最初三七日ニ限ラス、初成道ヨリ終涅槃迄只華嚴經ヲ説キ玉フト聞ク、小乗有縁ノ機カ聞クトキハ、佛一代阿含ヲ説キ玉フト聞ク、方等等モ亦然リ、此ノ如ク五時ニ通別ト分ル、ユヘンハ、別ノ五時ハ調機入実ノ化意ニ付テ立ル衆生ノ機類ノ利鈍ノ別アルカ故ニ、如来ノ化道ニモ頓漸五時ノ次第カ立テ、利根ハ先ニ華嚴ノトキニ入実シ、鈍根ハ後ニ鹿宛方等般若ト次第ニ調熟シテ、終ニ法華ニ至リテ入実スルナリ、又通ノ五時ハ當機益物ノ化意ニ付テ立ル、衆生ノ機類町々ナレハ同時ニ熟スル者ニアラス、鹿宛ノ時実機ノ熟スルモアリ、法華ノ後ニ新受小ノ機モアリ、孰レニモアレ其機ニ応シテ化益ヲ施スカ通ノ五時ナリ、然レハ前ノ五時ハ總シテ衆機ニ渡リ、通ノ五時ハ別シテ一類ノ機ニ逗スル化益ナリ、此二ノ中一家ノ正意ハ前ノ五時ニアリ、何故ナレハ、利鈍ノ根性ヲシテ齋シク一実ニ會入セシムルカ法華ナレハナリ、由テ今ノ四教儀モ別ノ五時ノミヲ明セリ、然ルニ別ノ五時ノミニテハ一代教ヲ判尽スルコト能ハス、故ニ玄義ニハ通別ノ五時ヲ明シテアリ、集註ニ引ク如シ

三十一義 四教証據

四十九右以下、化法ノ四教ヲ明スニ付、集註ニ四教ノ總名別義ノ依處（18）ヲ出シ、此四教ハ小乗ノ中ニハ

四教ト云フ総名アレトモ、藏通別円ト云フ別ナシト云々、然ルニ集註ニ列ヌルトコロハ、相似ノ証文ニテ的証ニハアラス、固ト此四教建立ノ旨意ハ、大部ノ四教義一ノ十一丁ニ出テ、即チ涅槃經ト中論トヲ四教建立ノ礎トスト有、正シク經論ニ名目アリテ立ル義ニアラス、義ニ由テ判スル赴ヲ明スニ、重々ノ問答アリ、其心ハ四教ハ三觀ヨリ起ル、其故ハ藏通二教ハ空ヨリ起リ、別教ハ仮ヨリ起リ、円教ハ中道ヨリ起ルナリ、又其三觀ハ反テ四教ニ由テ起ル、其三觀ト四教トハ中論ノ因縁所生法等ノ四句ヨリ起ル、乃チ因縁所生法トハ藏教ヲ送り、我說即是空トハ通教ナリ、亦名為仮名トハ別教ナリ、亦是中道義トハ円教ナリ、又其中道ノ四句ハ何ヨリ起ルヤト云ヘハ、即是レ心ナリトアリ、委クハ二百題三ノ廿七四教証拠ト云フ一題アリ、

### 三十二義 藏教大意

四十九左以下ニ明ストコロノ三藏教トハ即チ小乗教ナリ、此三藏ノ名目ハ大小ニ通スレトモ、今ハ小乗ノ三藏ヲ取ル通即別名ナリ、三藏トハ經律論ナリ、此藏教ノ法門ハ集註四十九左ヨリ中卷ノ終リ迄ニ廣ク之ヲ明セリ、此藏教ノ大意ハ四十九左ニ引クトコロノ四教義ノ門ニテ知ルヘシ、則チ此藏教ニハ因縁生滅ノ四諦ノ理ヲ明シ、正シクハ小乗ニ教ヘ旁ラ菩薩ニ教ユルニアリ、生滅四諦ノ理トハ、藏教ノ心三界ノ苦諦ノ果報ハ集諦ノ惑業ヨリ生シタル者ニテ、本来ノ義ノ外ナル者ナリ、故ニ無漏ノ道諦ヲ修シテ集諦ノ惑業ヲ断スレハ、三界苦諦ノ果報ハ断滅シテ空ニ帰ス、其空ニ帰スルトコロカ滅諦ノ涅槃ナリ、此生滅ノ四諦ノ事ハ五十四丁左ニ出ル、正教小乗旁教菩薩トハ藏教ノ別機ニテ、此藏教ノ中ニハ聲、緣、苦、ノ三乗アリ、聲緣ハ小乗ナリ、菩薩ハ藏教ノ中ニテハ大乘ト称ス、中卷六十四丁ニ出ルカ如シ、此ハ小乗中ノ菩薩



ニテ大乘ノ菩薩ニアサルナリ、故ニ三乗共ニ見思ノ惑ヲ斷シ、偏信<sup>(19)</sup>ノ理ヲ証スルコト同シキカ故ニ、概シテ小乗教トスルナリ、此藏教ノ所明ハ、初メニ三藏ノ教法諦縁度ノ相ヲ明シ、次ニ三乗ノ行位ヲ辨シテアリ、

### 三十三 藏教四諦

五十四左以下、凡テ藏通別円ノ四教ニ各苦集滅道ノ四諦ヲ明ス、此四諦ノ理ハ迷悟ノ因果ヲ明シタル者ニテ、略シテ八宗綱要万題ノ中、第十五義四諦名義ノ如シ、其中今藏教ニ明ストコロノ生滅ノ四諦ト云フハ、四諦共生滅無常ニ付テ立ル故ナリ、苦ハ生異滅ノ三相遷移シ、集ハ貪慎痴等分ノ四心流動シ、道ハ對治易奪ス、對治易奪トハ実有ノ道ヲ以テ彼ノ苦集ヲ對治ス、苦集アルトキハ道アルコトナシ、若道アレハ能ク苦集ヲ除クヲ易奪ト云フナリ、滅ハ実有ノ因果ヲ滅シテ無余涅槃ニ歸スルコトナリ、此四諦ノ相ヲ廣ク明スガ當段以下中卷ナリ、其大主ハ苦トハ三界ノ果報ナリ、集トハ其体煩惱ト業トナリ、之ヲ集ト名ルハ煩惱ト業ノ因ニ由テ三界ノ苦果ヲ招集ムルカ故ナリ、滅トハ無漏智ヲ以テ苦集因果ヲ滅無シテ得ルトコロノ果、道トハ戒定恵ノ三学等也、此四諦ノ中苦集ハ有漏ナリ、滅道ハ無漏ナリ、苦ハ集ノ果、集ハ之レ有漏ノ因ナリ、滅ハ之レ無漏ノ果、道ハ之レ無漏ノ因ナリ、此ノ如ク果ヲ先ニシ因ヲ後ニスルハ、俱舍論ニ喩ヲ挙げケテ、病ヲ見テ病ノ因ヲ知り病ノ癒ヘシコトヲ思テ藥ヲ報スルトアリ

三十四義 六度輪廻

五十五左苦諦ノ相ヲ明スニ廿五有ト云ヒ、六度生死ト云ヒ、三界ト云フ、此ハ開合ノ異ニテ合スレハ欲色無色ノ三界ナリ、開ケハ二十五有界ト云フ、總シテ地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、ノ六道ト云フナリ、此六道トハ一有情善惡ノ業因ノ不同ニ由テ、生死流転スル果報ニ差別アリ、即チ因ノ五逆十惡ニ上中下ノ三品アルカ故ニ、地獄、畜生、餓鬼ノ三惡ノ果アリ、又因ノ十善ニ下中上ノ三品アルカ故ニ、修羅、人、天、ノ三善ノ果アリ、此三界六道ハ凡テ生死輪廻ヲ免レス、苦果ノ不同アリト云モ凡テ有漏ノ果報ナレハ、有漏ノ果ニ望メテ見レハ永世ノ果ニアラス、苦域ヲ脱スルコト能ハサルナリ

卷二

第二学期 一月廿九日

第三十五義 見思二惑（中卷）

中ノ卷初メニ集諦ノ相ヲ明スニ、見惑思惑トアルハ、惑トハ煩惱ノ異名ニテ所縁ノ境ニ惑テ煩惱ヲ起スカ故ナリ、此惑ニ見思ノ別アリ、見惑トハ此卷四丁ニ明スカ如ク、其体身見等ノ十煩惱ナリ、此ハ迷理ノ惑ト云テ四諦ノ理ニ惑テ起ルモノニテ、此十煩惱ヲ三界ノ四諦ニ応テ分別スレハ増減ノ不同アルカ故ニ、十八使トナル、之ヲ見惑ト名ルハ、從解得名ニ約セハ見道ニ於テ無漏ノ智慧ヲ發シテ、四諦ノ理ヲ見ルトキ此惑ヲ断スルカ故ナリ、若シ當体受称ニ約セハ、見トハ推度分別ノ義ナリ、次ニ思惑トハ此卷七丁ニ明ス如ク、其体ハ前ノ十使ノ中ノ貪瞋癡慢ナリ、此ハ迷事ノ惑ト云テ色声等ノ事相ニ惑テ起ル者ニテ、此貪瞋癡慢ハ三界九地ノ中、欲界ニハ四アリ、上八地ニハ瞋ヲ除テ貪癡慢ノ三アリ、此九地ノ一惑ニ各疎細九品ノ不同アルカ故ニ、九々八十一品トナルナリ、之ヲ思惑ト名クルハ從解得名ナリ、修道ニ於テ重テ思慮シテ四諦ノ理ヲ觀シテ此惑ヲ断スルカ故ナリ、若シ當体受称ナレハ思トハ無塵等ノ事相ヲ思惟スルコトナリ、又此見思ニ惑ノ別ヲ分別起、俱生起ヲ以テ分ツコトナリ、邪師ト邪教ト邪思惟トノ三縁ニ由テ、殊ニ分別シテ起スヲ分別起ト云フ、之レ見惑也、三縁ニ由ラスシテ自然ニ此身ト俱ニ生スルヲ俱生起ト云フ、之レ思惑ナリ

(解) 見惑八十八。思惑十。十纏

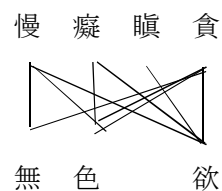
苦集滅道

十七々八

惟欲界

九六々七

上二界



無愧、無慚、嫉、慳、悔、□、掉、挙、昏沈、忿、覆、

### 三十六義 滅諦ノ義理

八丁左ニ明ス、滅諦トハ涅槃ノ事ナリ、乃チ生死ノ因果ヲ滅シテ空理ヲ悟ルコトニテ、大乘ハ人法ニ空ナレトモ、小乗ハ人空法有ト立テ、只人空ノ理ノ一边ヲ悟ル、故ニ偏真ノ理ト云ナリ、然ルニ滅諦ト云ハ真理ノ体ヲ滅スルニアラス、苦集ヲ滅スルニ由テ真理ヲ証顯スルコトナリ、故ニ集註ニ止觀ヲ引テ、法相真如ハ四諦ノ所作ヲ離レタルコトヲ示ス、真諦ノ理ハ煩惱モ訐カス能ハス、無相常住ナルカ故ナリ、生死ノ苦モ悩マス能ハス、不生不滅ナルカ故ナリ、戒定恵等ノ道ヲ修シテモ通スルコト能ハス、真理ハ不去不来ナルカ故ニ、滅諦ヲ以テ煩惱ヲ滅シテモ真理ヲ清ムルコト能ハス、本来清淨ナルカ故ナリ、仮令ハ雲ノ月ヲ圍メトモ月ノ体ヲ害スルコト能ハス、故ニ雲ヲ払ヘハ月ノ体ハ固ヨリ清キカ如シ、今真諦ノ理ハ月ノ如シ、苦集ハ雲ノ如シ、道諦ハ雲ヲ払フ如シ、滅諦ハ払ヒ終ルカ如シ、雲ヲ払フヲ以テ月ノ害ト思フヘカラス、煩惱ヲ滅スルヲ以テ真諦トスルニアラス、只滅ニ由テ真理ヲ証顯スルノミナリ

三十七義 七科道品（道ハ通ノ義涅槃ニ通スルナリ）

九丁以下、道諦ノ三十七道品ヲ合シテ七科トシテ明ス、此道品ハ大乘小乘有漏無漏ニ通ス、今ハ頂ク小乘ニ付テ之ヲ明ス、其中初メニ四念處ノ觀ヲ明ス、此四念處觀ハ身受心法ノ四ヲ、次第ノ如ク不淨ナリ苦ナリ無常ナリ無我ナリト觀ス、此ハ何ノ為メナレハ、淨樂我常ノ四轉倒ヲ對治センカ為ナリ、四轉倒トハ吾人ハ不淨ヲ淨ト執シ、苦ヲ樂ト執シ、無常ヲ常ト執シ、無我ヲ我ト執スルカ故ナリ、此身受心法トハ衆生ノ体トナル五陰ノコトナリ、此五陰ノ和合セルヲ人ト名ク、五陰ノ外ニ人ナシ、此五陰ヲ開ケハ十二入トナリ（六根、六塵入ハ法入ナリ）十二入ヲ開ケハ十八界トナル（十二入上ニ六我ヲ加ヘテ）次ノ図ノ如シ、此四念處觀ヲ始トシテ、次ニハ四正勤等ヲ順次ニ修スルナリ

三十八義 四種四諦

十七左、藏通別円ノ四教ノ廣狹勝劣ニ從テ、四種ノ四諦ヲ明ス、生滅無生無量無作ナリ、此ハ真理ニ惑フニ重輕ノ不同アルヲ以テ生滅無生ヲ論ジ、中道ノ理惑ニ重輕ノ不同アルヲ以テ無量無作ヲ論ス、此中生滅之四諦ハ上ニ已ニ出タリ、無生ノ四諦ハ苦無ニ逼迫ノ相。集無ニ和合ノ相。道不ニ二相。滅無ニ生相。四諦因果。感ニ当相即空ノコトナリ、次ニ無量之四諦トハ苦有無量之相十界ノ果法不同也、集有無量之相、安住地之煩惱不同也、滅有無量之相請波羅蜜不同也、道有無量相恒沙之佛法不同也。故無量之四諦ト云フナリ、次ニ無作ノ四諦トハ、苦果ノ其体真如ナレハ苦ノ捨ヘキナリ、煩惱即菩提ナレハ集ノ斷スヘキナリ、生死即涅槃ナリ、滅ノ証スヘキナリ、辺邪皆中正ナレハ道ノ修スヘキナシ、故ニ無作ノ四諦ト云ナリ、

三十九義 声聞外凡

十九左以下、声聞ノ修業ヲ位次ヲ以テ明スニ凡ト聖トアリ、凡ノ中、外凡ト内凡トヲ別ツ、此凡聖内外ノ區別ハ、凡トハ未タ無漏智ヲ発セサル者ヲ指ス、聖トハ一分煩惱ヲ断シテ無漏智ヲ発セル以上ノ者ヲ指ス、又凡夫ノ中内外アリ、内凡トハ相似ノ別解ヲ得テ、相似ノ理ヲ見テ真理ノ中ニ遊フ者ヲ指ス、之ニ反スル者ヲ外凡ト云ナリ、其外凡ノ位ニ三ヲ別ツ、初メニ五停心觀トハ、不淨觀・慈悲觀・因縁觀・拆界觀・数息觀ノ五法ヲ修シテ、多貪、多瞋、愚痴、着我、散乱ノ五過ヲ止住スルカ故也、二ニ別相念處トハ、已ニ上ニ出タル四念處觀ニ身受心法ノ四ヲ格別ニ觀スルカ故ニ、別相念處ト名クルナリ、三ニ認相念處トハ、前ノ身受心法ノ四ヲ認シテ觀スルコトニテ、身ハ不実ト觀スレハ受心法モ皆不定也、乃至法ハ無我ト觀スレハ身受心モ亦無我ト觀スルコトナリ

四十義 声聞内凡

三十一左、声聞ノ内凡ノ位ヲ明スニ、煖頂忍卅第一ノ四加行位アリ、此中煖ト頂トハ喩ニテ、煖トハ正ニ夏熟ニ赴カントシテ春陽ノ煖氣前ニ發スルカ如ク、別相念處ノ觀ヲ修シテ四諦ノ理ヲ觀スルニ、未タ断惑ノ真智ハ起ラサレハ、先ツ相似ノ解ヲ生シテ煩惱ヲ伏スルナリ、次ニ頂トハ、山頂ニ登リテ四方ヲ見レハ明了ナルカ如ク、相似ノ解轉増進シテ四如意定ヲ得、十六行相ヲ修シテ四諦ノ理ヲ明スニ觀スルコトナリ、次ニ忍トハ惠ノ別名ニテ、似解益増進シテ惠ヲ以テ四諦ノ理ニ於テ忍可決定スルナリ、此忍ニハ下中上ノ三忍アリ、中忍ノ位ニハ現縁現行ト云ハル解シ難キ觀法アリ、次ニ世第一トハ世有トハ有漏ナリ、第一ト

ハ最勝ノ義ニテ此位ハ有漏ノ中最勝ノ位ニテ、一刹那ニ欲ノ苦ヲ觀スル一行相ニテ、次ニハ無漏ノ見道ニ入ルナリ

四十一義 十六行相 (不大切)

三十三丁ニ、苦集滅道ノ四諦ノ理ヲ具ニ觀スルニ、四諦ニ各四行相ヲ別ツカ故ニ十六行相トナル、苦空無常無我、集因緣生滅尽妙離、道正迹乘、初メニ苦諦ノ下ノ四行相トハ、一二苦トハ此身ハ生死有漏ノ苦果ナリト觀ス、二ニ空トハ、此身ハ四大五陰ノ和合セル者故、分散スレハ空ニシテ体ナシト觀ス、三ニ無常トハ、此身ハ念ニ生滅ヲ移リテ無常ナリト觀ス、四ニ無我トハ、此身ヲ分拆スレハ我ト執スヘキ者ナシト觀スルナリ、次ニ集諦ノ下ノ四行相トハ、一二集トハ、惑業ハ生死ノ苦果ヲ招集スル者ト觀ス、二ニ因トハ、惑業ハ生死ノ果ヲ受クヘキ種子ナリト觀ス、三ニ生トハ、惡業ニ依テ未來ノ果ヲ生スヘシト觀ス、四ニ緣トハ、惡業ハ未來ノ果ヲ受ル緣トナルト觀スルナリ、次ニ滅諦ノ四行相トハ、一二滅トハ、涅槃ハ撰滅ノ智ヲ以テ煩惱ヲ滅無シタル者ト觀ス、二ニ尽トハ、涅槃ハ一切ノ苦ヲ尽キタル者ト觀ス、三ニ妙トハ、涅槃ハ一切法ノ中第一ニシテ微妙ナリト觀ス、四ニ離トハ、涅槃ハ生死ヲ離レタル者ト觀スルナリ、四ニ道諦ノ行相トハ、一二道トハ、戒定惠等ハ涅槃ニ至ルヘキ因道ト觀ス、二ニ正トハ、戒定惠等ハ転倒ヲ離レテ正理ニ適ヘルト觀ス、三ニ迹トハ、戒定惠等ハ修行スヘキトコロノ法迹ナリト觀ス、四ニ乗トハ、戒定惠等ハ涅槃ニ運載スル法ナリト觀スルナリ、

四十二義 声聞三道

三十六右、声聞ノ聖意ヲ明スニ見修無学ノ三道ヲ分ツ、初メニ見道トハ世第一法ノ次ニ初メテ無漏ノ真如ヲ發シテ実ノ如ク四諦ノ理ヲ照見シテ分別起ノ煩惱ヲ断尽スル位ヲ見道ト云フ、二ニ修道トハ重テ思慮シテ四諦ノ理ヲ觀シ無漏智ヲ修習スル位ナルカ故ニ修道ト云フ、三ニ無学道トハ所作已辦ノ徳ニテ四諦ノ理ヲ觀シ極メ煩惱ヲ断尽シテ此上ニ学フヘキ事ナキカ故ニ無学道ト云フナリ、

四十三義 声聞四果

三十七左声聞ノ四果ヲ明セリ、一二預流果トハ、三界八十八便ノ見惑ヲ断シ、凡位ヲ離レテ初メテ聖位ニ入リシ事ナリ、二ニ一來果トハ、三界九地ハ十一品ノ修惑ノ中欲界ニ九品アリ、其九品ノ中前六品ノ惑ヲ断尽シテ、之ヨリ以后三品ノ惑ヲ断セシカ為メニ、欲界ノ人ト天トヲ一度性来スヘキ位ナリ、三ニ不來果又不還果トモ云フ、欲界ノ下三品ノ修惑ヲ断尽シテ欲界ニ還来セサル位ナリ、四ニ無学果トハ、上ハ地ノ七十二品ノ修惑ヲ断尽シテ、重ネテ三界ノ惑ヲ受ケサル位ニテ、此上ニ学フヘキ法ナキカ故ニ無学果ト云フ、此無学トハ梵語ニ阿羅漢ト云フ、此阿羅漢ノ言ハ多含ニシテ、殺賊、応供、不生、ノ三義アリ、殺賊トハ煩惱ノ賊ヲ殺スコト此ハ喻ニ約ス、不生トハ三界六道ノ生ヲ受ケサルコト、応供トハ人天ノ供養ヲ受ルニ堪タルコトナリ、猶此阿羅漢ノ位ニ付、子傳果傳有余涅槃無余涅槃ノ別アリ、文ニ付テ智ルヘシ



#### 四十四義 緣覺種類

五十六丁、緣覺ノ位ヲ明ス、又ハ独覺ト名ク、此緣覺ト独覺トノ別ハ、緣覺トハ佛ノ出世ニ遇テ、内ノ十二因緣ヲ觀シテ悟ヲ開クモノナリ、独覺トハ無佛ノ世ニ出テ、飛花落葉等ノ無常ノ相ヲ觀シテ無佛自悟スルモノナリ、又此独覺ノ中、麟喻ト部行トノ別アリ、然ルニ此ノ緣覺ト独覺トハ其根性同シキ力故ニ、真ニ通スルコトナキニアサルナリ

#### 四十五義 十二因緣

五十九丁以下ニ明ストコロノ緣覺ノ觀スル十二因緣ニ付テ、三世兩重ト別ツコトアリ、曰過去ノ二因、現在ノ五果、現在ノ三因、未來ノ二果ナリ、乃チ十二ノ中無明行ノ二ツハ過去ノ二因ナリ、識等ノ五ハ現在ノ五果ナリ、愛・執・有ノ三ハ現在ノ三因ナリ、生・老死ノ二ツハ未來ノ二果ナリ、之ヲ三世兩重ト分ツハ小乗ノ義ナリ、大乘ニテハ二世一重ト立ル、曰過去ノ十因、現在ノ二果、現在ノ十因、未來ノ二果ナリ、此卷廿七丁ヲ見ルヘシ、然ルニ前ノ四諦ト十二因緣トハ総別ノ異アルノミ、四諦ハ總シテ有漏無漏ノ因果ヲ明シ、十二因緣ハ別シテ有漏ノ因果ヲ明ス、四諦ノ中ノ苦集ノ二諦ニ收マルナリ、猶此十二因緣ヲ觀スルニ、生緣ヲ觀スルト滅緣ヲ觀スルトアリ、此二ニ各々順觀ト逆觀トアリ、智ルベシ、又此十二因緣ハ前ノ四諦ト同シク四教ニ通スルナリ、曰思議生滅ト、思議不生滅ト、不思議生滅ト、不思議不生不滅ナリ、次第ノ如ク四教ニ配スヘシ、委シク玄義二ノ二廿五丁ニ出ル

#### 四十六義 菩薩ノ行位

六十四丁、藏教ノ菩薩ノ位ヲ明セリ、集註ニ辨スル如ク、此菩薩ハ三藏教ノ中ニ於テハ大乘ト称ス、其故ハ声聞縁覺ヲ小乗トシテ、菩薩ヲ大乘トスルカ故ナリ、然レトモ後三大乗ヨリ見レハ、固ヨリ小乗ノ菩薩ナリ、故ニ菩薩ニハ大乘ノ菩薩ト小乗ノ菩薩トノ別アリト智ルヘシ、凡ソ此三藏教ノ菩薩ハ、初發心ノ位ニ四諦ノ境ヲ縁シテ四弘誓願ヲ發ス、四弘誓願トハ度斷學成トモ度斷智証トモ云フ、其ヨリ三僧低劫ニ布施授戒等ノ六道ノ業ヲ修シ、百劫ニ相好ノ業ヲ極テ、而後八忍八智九無礙九解脫ノ三十四心ヲ以テ、煩惱ヲ斷シテ成佛スルナリ

#### 四十七、 三轉法輪

七十四丁、佛ノ說法スルコトヲ法輪ヲ轉スト云フ、此ハ輪ニ轉度ノ義ト摧壞ノ義アリ、衆生ノ胸中ヘ法ノ運リ入ルト、衆生ノ煩惱ヲ碎キ滅スル喩ルナリ、然ルニ三輪ト云フハ、頂ク声聞ノ為メニ說法スルニ約ス、三轉トハ一ニ示轉、此ハ四諦ノ理ヲ苦ナリ集ナリ等ト説示スコト、二ニ勸轉、此ハ苦ヲ智リ集ヲ斷スヘシ等ト勸ムルコト、三ニ悟轉、此ハ苦ハ吾レ既ニ智レリ、集ハ吾レ已ニ斷アリ等ト、自証ヲ引テ説クコトナリ、又此三轉ノ一々ニ眼智明覺ヲ生スレハ十二行法輪トナル、眼智明覺トハ、前ニ出タル法忍法智類忍類智ノ事ナリ

## 四十八義 通教名義

下卷初下以下ニ明ストコロノ通教ハ、界内ノ理教ト名ケテ三界六道ノ内ノ事ノミヲ教ユルトコロハ、前ノ藏教ト同シコトナレトモ、此教ハ因縁ノ道理ヲ深ク教テ専ラ空理ヲ談ス、即チ業煩惱ニ由テ生スルトコロノ現前ノ因縁生ノ諸法当体即チ空ナリト教ユ、之ヲ体空觀ト云フ、之ニ付、通教ノ名ヲ釈スルニ、本文ノ上ニ二義アリ、初メハ通前通後ノ義、後ハ三乘通同ノ義ナリ、初義ハ独リ菩薩ニ付テ釈ス、此ハ鈍根ノ菩薩ハ前ノ藏教ニ通同シテ偏真ノ空理ヲ悟リ、利根ノ菩薩ハ後ノ別円ニ通入シテ中道ノ理ヲ悟ル、之レヲ鈍同ニ乘利入別円ト名ルナリ、後義ハ通シテ三乘ニ付テ釈ス、此ハ通教当分ノ義ナリ、即チ三乘ノ人同シク無生ノ諦縁度ヲ觀シテ、因縁生ノ当体如幻即空ト体達シテ空理ニ入ル、故ニ三乘通同ノ教ナリ、此ノ如ク通教ノ名ニ二義アルユヘンハ、元来此通教ハ正為菩薩旁通二条ノ教ニシテ、大乘ノ初門ナルカ故ニ、藏教ト同シク空理ヲ談ストモ、此中ニ中道ノ理ヲ含テアリ、此レヲ含中ト云ナリ

## 四十九義 三乘共位

二丁左ニ図ヲ出ス如ク、三乘共通シテ乾慧等ノ十地ヲ立ル、之ヲ三乘共位ト名ケテ、声縁菩ノ三乘ノ断障得果ノ階級ヲ共同シテ十地ヲ立ル、地ハ住所ノ義ニテ断証ノ住所ナリ、然ルニ三乘ノ機根ノ優劣ニ從テ地位ニ長短アリ、全ク三乘ノ共スルハ七地マテナリ、声聞ノ位ハ第七地ニ限り、縁覺ノ位ハ第八地ニ限り、第九、第十ノ兩位ハ単ニ菩薩ノ位ナリ、然レトモ初メニ從テ三乘共位ト云ナリ、約スルトコロ此三乘ノ共位、因同果異ニシテ断惑ニ同使ヲ断スルト、習氣ヲ侵スト正習共ニ断尽スルトノ別アレトモ、同シク見思

ヲ断シ、同シク三界ノ分段生死ヲ出テ、同シク偏真ノ理ヲ証スルカ、通教ノ当分也

### 五十義 三獸度河

八丁ノ右、涅槃ト華嚴ノ二經ヲ引テ、通教ノ断惑証理ノ異同ヲ示ス、其中涅槃經ニ三獸度河ノ喩アリ、三獸トハ象馬兔ニテ、菩薩ト縁覺ト声聞トニ喩フ、河トハ所証ノ真理ニ喩フ、此三乗ハ孰レモ悟ルトコロノ真理ハ同一ナレトモ、機根ニ勝劣アルカ故ニ智慧ニ浅深アリ、從テ断惑ニ不同アリ、故ニ所証ノ真理ニ自カラ浅深ヲ成スルナリ、集註ニ云フカ如ク、菩薩ハ正使ト習氣トヲ共ニ断尽ス、縁覺ハ正使ヲ断シ、習氣ヲ犯スノミニテ断尽セス、声聞ハ只正使ノミヲ断シテ、更ニ習氣ヲ除クコト能ハサルナリ

### 五十一義 空中別写

九丁ノ右、通教ノ菩薩ノ中、利鈍ノ二種ヲ明スニ付、空ノ中、偏空不空ト云ヒ、中道ノ中、但中不但中ト云フハ如何ト云フニ、偏空トハ、偏真ノ空理ニシテ、真理ノ中ニ差別ノ諸法ヲ具スルコトヲ知ラサルヲ偏空ト云フ、不空トハ中道ニシテ理体ハ空ニアラス、此空ニ一切万法ヲ具セリト知ル事ナリ、次ニ中道ノ中ノ但中トハ、破情ノ空ト位法ノ假、此空假ノニヲ離レタル中道ヲ云フナリ、不但中トハ、空假別中ト悟ルヲ云ナリ、此偏空ハ通教ノ人ノ所知、但中ハ別教ノ人ノ所知、不但中ハ縁共ノ人ノ所知

(解)無物ノ處即無尽藏)

## 五十二義 被接名義

九丁左、通教ノ相ヲ明スニ、別教ニ来接スルト円教ニ来接スルトノ二義ヲ明セリ、来接トハ、通教ノ人ノ別円二教ニ来入シテ被接スルコトナリ、被接トハ、両理ノ交際ニテ、両理トハ空理ト中道ノ理ナリ、被ノ字、佛ニ約スルト衆生ニ約スルトノ二義アリ、集註ノ如シ、接ノ字ニモ接族<sup>20</sup>ト交接トノ二義アリ、接族ノ義トハ、通教ノ機ニ別円ノ法ヲ接ムコトニテ、假令ハ常桃李ニ善キ桃李ヲ接クカ如シ、通教ノ機ニ別円ノ益ヲ得セシムルコトナリ、交接ノ義トハ、界内ノ教ト界外ノ教ト、両處ノ間ニ被接ヲ論シテ交エシ義ナリ、此被接ニ三種アリ、一二別接通トハ、通教ノ人ガ但中ヲ見ルハ不智ヘ円教ニ入ルトコロナリ、二ニ円接通トハ、通教ノ人ガ不但中ヲ見ルハ不智ヘ円教ニ入ルトコロナリ、此三種ノ被接ノ中ニ於テ、前ノ二ハ通教ニ約シ、後ノ一ハ前教ニ約スルナリ、

## 五十三義 別教ノ名義

十二丁左以下ニ明ス、別教ハ独リ菩薩法ニシテ、此教意ハ理ハ平等、事ハ差別ト立テ、法性ノ理ハ平等ナレトモ依正色心ノ事相ノ差別スルハ無明ノ所為ニシテ、此ハ本来理ノ外ナル者ナリ、故ニ九界差別ノ相ヲ取直シテ、佛界平等ノ理ニ引戻ス様ニセヨト、界外鈍根ノ菩薩ニ修証ノ法ヲ教ユルヲ別教ノ教意トス、此独菩薩ノ法前ノ藏通二教ニモ後ノ円教ニモ別異ナルカ故ニ、別教ト云ナリ、其別ノ義ヲ明スニ、教理智断行位因果ノ八種アリ、教トハ界外ノ法ニシテ、二乗二度ラス菩薩ニノミ被ル、次ニ理トハ隔歴ノ三諦ニテ、被情ノ空ト立法ノ假ト絶待ノ中トヲ格別ニ次第ニ明ス、次ニ智トハ、一切智ト道種智ト一切種智トナ

リ、此ハ次第第二三觀ノ因ヲ修シテ、次第第二三地<sup>(21)</sup>ノ果ヲ得ルナリ、次ニ断トハ、見思、塵砂、無明ノ三惑ヲ前後ニ断ス、次ニ行トハ、聖行、梵行、天行、病行、嬰兒行ノ五行ヲ差別シテ修ス、次ニ位トハ、五十二位ノ因果ノ諸位差別アリ、次ニ因トハ、地前ニアリテハ本具中道ノ理ハ空仮ノ二辺ヲ離レテ別ナル故ニ、一因迥出ルト云ナリ、次ニ果トハ、初地以上ニ至レハ佛界中道ノ理ガ一分顯ハルヽ、其ヨリ修行シテ漸々ニ仏界中道ノ理ヲ顯ハス故ニ、一果不融ト云ナリ、以上ノ八法ハ界外ニ度ル法門ニシテ、独り菩薩ニ被ルカ故ニ、前ノ藏教ニ別ナリ、又此ハ、法一々隔歷次第スル故ニ、後ノ円教ニモ別ナリ、故ニ別教ト名ルナリ

#### 五十四義 隨緣真如

十六右、別教ニ談スルトコロノ十信ノ相ヲ明シテ、若聞説別教因縁等トアリ、大凡此別教ノ所談ハ、一理隨緣シテ十界ノ諸法トナル、則チ真如ノ理ハ平等ナレトモ、無明ノ縁ニ随テ九界差別ノ妄法トナル、假令ハ一種ノ地ガ陶器師ノ所作ニ由テ、種々ノ形ヲナスカ如シ、故ニ九界差別ノ相ヲ断破シテ、元ノ佛界平等ノ理性ヲ顯ハストス、之ヲ縁理断九ノ権門ト云フ、此ニ於テ別理隨緣ト円理隨緣トノ異ヲ嚮スヘシ、抑モ別教ニアリテハ、真如ノ一理隨緣シテ十界ノ迷悟ノ差別ノ法トナル、然レトモ真如ト諸法ハ自体隔異シテ理具ヲ談セス、故ニ但理隨緣ト云フ、法華玄義ニ、当教論中但空<sub>下</sub>異<sub>上</sub>而已無効用不備諸法トアリ、然ルニ天台ハ別教ノ理ヲ明スニ只諸法ヲ生スト云ヒ、或ハ一切法ヲ出スト云テ隨緣ト云ハス、四明ニ来リテハ隨緣ノ言アリ、之レ生法ト云ヘハ能生所生ノ体ヲ異ニス、母ノ子ヲ生スルカ如シ、隨緣ト云ヘハ理ノ自体ヲ轉シテ諸法トナレハ、理具事造ノ体一ナリ、故ニ其義差別アリ、然ルニ若シ真如ノ理体ニ自性ヲ守ラス、

縁ニ随フノ義ナクンハ、何ソ薰ヲ受ケ法ヲ生スルコトヲ得ン、故ニ深ク生法ノ理ヲ究ムレハ、又隨縁ト異ナラス、之ヲ以テ隨縁ト生法ハ与奪ヲ以テ論セハ、若シ唯識ノ真如凝然不作諸法ニ対スルトキハ、別理ノ生法之ヲ与ヘテ隨縁ト云フヘシ、若シ円教ノ理具ノ隨縁ニ望ムレハ、但理隨縁ハ之ヲ奪テ生法ト名クヘシ、此別理隨縁ハ起信論ノ法相ニ当ル、彼論ニハ一心真如自性ヲ守ラスシテ染淨ノ縁ニ随フト明シ、因果ヲ挾ハスシテ隨縁ヲ談ス、然ルニ起信ノ隨縁ヲ賢首ハ之ヲ判シテ終教ノ位トシ、華嚴ノ法門ハ円融無碍ヲ以テ談ス、探玄記及ヒ五教章ノ中、円教ヲ明スニ皆ナ性起ト云テ生具ト云ハス、故ニ彼家ニハ円ト雖、終ニ今家ノ別教所談ノ分域ヲ出テサルナリ、次ニ円教ニアリテハ、本末一念ノ心ニ具スルトコロノ三千ノ理体力、縁ニ從テ三千ノ事用ヲ起ス、十界迷悟ノ諸法ハ本末理ニ具スルトコロノ性徳ナリ、中道ノ理ト別ナル者ニアラス、玄義ニ具一切法一与ニ前中一異也トアリ、其理具ノ三千ノ其偃ニ事用ヲ起スヲ全性起修ト云フ、理具ノ三千ハ仮令ハ生レナカラ具ヘテアル五体ノ如シ、事用ノ三千ハ所作ノ働ノ如シ、本具ノ理体力縁ニ從テ鬼トモ也、佛トモナリテ働クカ事用ナリ、之ニ由テ前ニハ筆ヲ採リテ文字ヲ書キ、次ニ書物ヲ開テ之ヲ読ム如ク、種々ニ所作ハ異ナレトモ、前ノ手力滅シテ後ノ手ガ生レタルニアラス、只此レ生レ付ノ手力種々ニ働クナリ、其種々ノ働カ生ナカラ具ヘテアル五体ノ徳ナリ、人力死シテ天ニ生レ、乃至菩薩佛界ト移レハトテ、新ニ生滅スルニアラス、本具ノ三千ノ理体力隨縁シテ三千ノ事用ヲ起スノミ、之レ本具ノ理体力ノ徳ナリ、前来辦スルトコロノ別教ト円教トノ隨縁ノ意ハ、法性ト諸法ト体ノ異ナルハ別理隨縁ナリ、法性ト諸法ト体同ナルハ円理隨縁ナリ、委シクハ、十不二門指要鈔ニ付テ智ルヘシ、

(解)起信ハ後三大乗ニ通シテ説ケリ、而シテ別位ニテ通円ニ通ス、性ニ惡ヲ具ストハ天台ノ殊点ニシテ、善ヲ顯ストハ通シテアリ、而シテ此惡善ニ各性修アリ、後ニ懺ス)

## 五十五義 從假入假

十六左以下別教ノ階位ヲ明ス中、空假ノ二觀ノ次第二付、十信十住ノ下ニハ從假入空觀トアリ、十行ノ下ニハ從空入假觀トアリ、此ノ如ク空假ノ二種前後不同アルハ如何ト云フニ、此ハ假ニ二種アリ、一二建立ノ假、二ニ生死ノ假ナリ、此ハ空ノ前ニアル假ハ生死ノ妄境界ヲ指ス、之ヲ生死ノ妄假ト云フ、此書廿一右觀經疏ヲ引テアリ、則チ生死ノ妄法ヲ觀破シテ真諦ノ空理ニ入ルヲ從假入空觀ト云フナリ、又空ノ後ニアル假ハ建立ノ假ニテ、十界ノ差別ノ法ヲ立ルコトニテ此書廿二左觀經ノ疏ヲ引テアリ、則チ空觀ヲ成就シテ見思ノ惑ヲ斷尽シ、我法ノ執ヲ離レタ上ニ、十界差別ノ諸法ヲ建立シテ、衆生ノ所治ノ病ニモ恒沙無量ノ煩惱アリ、能治ノ法門ノ藥ニハ恒沙無量ノ佛法アリ、其アラユル藥病ニ通達シテ更ニ謬リナキヲ、建立ノ假ト云フナリ、

## 五十六義 三惑名義

此ハ十八右ニ明ストコロニテ、三惑トハ見思ト塵沙ト無明トナリ、此ハ空假中ノ三諦ノ理ニ惑テ三惑ヲ起シ、三惑ヲ斷スルニハ三觀ニ由リ、三觀ヲ成スレハ三智ヲ得ルナリ、三惑ノ中、見思ノ惑ハ界内ノ通惑ニテ、藏通二教ニモ之ヲ斷ス、塵沙無明ハ界外ノ別惑ニシテ、別円教ノ斷スルトコロナリ、此三惑ノ中、見思ノ惑ノ事ハ、中卷ノ初メ第三十五題ノ如シ、塵沙ノ惑トハ、藏通二教ニ斷スルトコロノ見思惑ノ習氣ノ事ナリ、此ノ塵沙ノ事ハ、此書十八右諸文ヲ引ケリ、此塵沙トハ唯識ノ所智障、俱舍ノ具不染汚無智ナリ、塵沙トハ數ノ多キ喩ニテ、十界ノ依正六道四生善惡苦樂等所智ノ境界ハ無量無辺ナルカ故ニ、所智ノ境ニ



從ヒテ能迷ノ惑ノ名ヲ立ツ、集註ニ引ク輔行ニ塵沙トハ、無智ノ数ノ多キニ喩フトアリ、此ハ塵沙ノ名ヲ能迷ノ無智ニ約シテ釈シテアレトモ、実ハ所迷ノ境ノ名ナリ、所迷ノ境ハ無量ナレトモ、能迷ノ体ハ劣慧ニテシテ、数ノ多キニアラサルナリ、次ニ無明ノ惑トハ根本無明ノ事ニテ、生死ノ根源迷真ノ一念ナリ、一念ノ無明ガ起リ初メテ法性ノ月ヲ蔽クシテ惑ノ凡夫トナレリ、之ヲ元品ノ無明トモ無始ノ無明トモ云ナリ。此三惑ハ地持論等ニ説クトコロハ、煩惱所智ノ二障ノ事ニテ、見思ノ惑ハ煩惱障塵沙、無明ハ所智障ナリ、所智障ノ中ヨリ後ノ二惑ヲ開クユヘンハ、事相ヲ智ルヘキ智恵ヲ障ヘル者ハ、塵沙ノ惑理障ヲ智ルベキ智ヲ障ルモノハ無明ノ惑也、此ニ付、見惑ト思惑ト塵沙ト無明ト四惑ナリ、何ソ三惑ト名クルヤト云フニ、此ハ見惑ハ所縁ノ境ニ執シテ起ル惑ナレハ空理ヲ障ユル、故ニ空觀ヲ以テ対治ス、塵沙ハ恒砂ノ法門ニ暗キ惑ナレハ化道ヲ障ユル、故ニ假觀ヲ以テ断ス、無明ハ中道ノ理ニ惑テ起ル惑ナレハ中道ヲ障ユル、故ニ中觀ヲ以テ破スルナリ、然レハ一ノ空觀ヲ以テ見思ノ惑ノ能対治トスルカ故ニ、見思ヲ合シテ一ノ惑トスルナリ、此三惑ヲ断スルコトハ別円二教同シケレトモ、別教ハ三惑ノ体ヲ不即トシ、円教ニハ三惑同体ニシテ疎中細ノ別トス、又別教ニハ三惑異時断トシ、円教ニハ三惑同時断トス、其義円教ノ下ニテ智ルヘシ

### 五十七義 三諦三觀

此ハ廿丁左ニ明ストコロニテ、三諦ト云モ三觀ト云モ共ニ空假中ノ三ナリ、此ハ所觀ノ理体ニ約セハ三諦ト云ヒ、能觀ノ智恵ニ約セハ三觀ト名ク、妙樂止觀大意ニ諦觀名別体復同トアリテ、三諦三觀名ハ異ナレトモ体ハ同一ナリ、初メニ三諦トハ、妙樂ノ始終心要ニ、三諦トハ天然ノ性徳ナリトアリテ、此ハ法ノ上

ニ本来具シテアル徳ナリ、上ハ仏界ヨリ下ハ地獄界マテ、十界ノ依正色心ノ諸法ノ上ニ、天然自然ト具スルトコロニテ、更ニ人ノ所作ニハアラサルナリ、頂ク心法ニ付テ云ハ、法ハ固ヨリ融シテ隔テナキ者故、介爾ノ一念ノ心ニ三千ノ法ヲ具スル、之ヲ一念三千ト云フ、然レハ三千ハ法体ナリ、三諦ハ法徳ナリ、三千ノ法体ノ上ニ三諦ノ徳ヲ具シテアル、故ニ法徳ニ由テ一念ノ心カ直ニ三千ノ法ナル事カ顕ハル、假令ハ太陽ノ体ニ光ヲ具ヘテアル故ニ、光ノ徳ニテ太陽ノ体ノ顕ハル、如シ、其三諦ト云フハ、略シテ云ハ空ハ破情ノ徳、假ハ立法ノ徳、中ハ絶待ノ徳ナリ、初メニ空ハ破情ノ徳トハ、本来法ノ上ニ定レル自性ナキカ故ニ、十界万差ノ諸法ハ迷情ヲ以テ、此ハ色ナリ心ナリト定ムルコト能ハス、何故ナレハ一念ノ心カ直ニ三千ノ法故、此ハ仏ナリ此ハ鬼ナリト定ムルトキハ、法ノ自性ニ叶ハサレハ、皆破サルヲ空ト云ナリ、次ニ假ハ、立法ノ徳トハ前ノ如ク法ノ上ニ本来定マレル自性ナキカ故ニ、縁ニ從テ如何ナル法トモ顕ハル、一念ノ心即三千ノ法ナレハ、能ク物ニ応シテ染縁ニ随ヘハ地獄界ト顕レ、淨縁ニ随ヘハ仏界ト顕ハル、ヲ假ト云フ、次ニ中ハ、絶待ノ徳トハ前ノ如ク法ノ上ニハ定レル自性ナキカ故ニ、縁ニ随テ鬼トモ仏トモ顯ル、之レ空ノ故ニ假ナリ、又縁ニ随テ仏トモ鬼トモ顯レハ、此レハ仏ナリ鬼ナリト定ムル事能ハス、此レ假ノ故ニ空也、如口空ト假トハ同体ニシテ、相手ノ立タサルヲ中諦ト云フ、然レハ三諦ハ法ノ本有ノ徳ナレハ、体一互融ニシテ三諦則一諦也、三一相即無碍ナル円融ノ三諦ト云フ、之ヲ止觀ニ譬如明鏡明喻即空像喻即假鏡喻即中トアリ、以上頂ク心法ニ付テ嚢シタレトモ、心法ノミナラス一色一香無非中道ナレハ、孰レノ法モ皆如此（<sup>22</sup>）シ、次ニ三觀トハ、前ニ明セシ性徳ノ三諦ガ修徳ノ智恵トナリテ、本具ノ徳ヲ顯ハス事ニテ、三觀ノ智ヲ以テ之ヲ照セハ、今マテ迷情ヲ以テ隔テ、アリシ依正色心ノ相ハ泯亡シテ、本具ノ融妙ノ三千一時ニ顯見シテ、一切ノ衆生ハ皆ナ毘盧舍那ノ体ト顯レ、一切ノ国土ハ尽ク寂光淨土ト顯レテ円融相即セリ、然レハ三諦ハ性徳ニシテ法ノ自性也、三觀ハ修徳ニシテ人ノ所作ナリ、然レトモ修性不二

ニシテ別物ニハアラス、假令三諦ハ人ノ五体ノ如シ、三觀ハ人ノ所作ノ如シ、性徳ノ五体ノ外ニ所作ノ法ナシ、其義智ルヘシ、凡ソ此三諦三觀ハ別円二教何レモ之ヲ談ストモ、別教ノ三諦ハ隔歴ノ三諦也、円教ノ三諦ハ円融ノ三諦也、又別教ノ三觀ハ次第ノ三觀也、円教ノ三觀ハ一心三觀也、故ニ諦觀ノ名目ハ同シト雖、其義理ハ異也、然ルニ前來辨シタルハ円教ノ心ナリト智ルヘシ

#### 五十八義 入重玄門

此ハ廿七左ニ出ルトコロニテ、此ハ大部ノ四教義入重玄門倒修凡夫事トアリテ、等覺ノ位ニ於テ仏果ヲ成スル前ニ更ニ重ネテ、無始ノ凡夫地以來ノ所作ノ事ヲ修習シテ、一二理ニ合シテ照スコトナリ、凡ソ別教ノ菩薩ニ於テハ、元品ノ無明ハ断シカタキ故、重ネテ三界六道ニ立戻リテ凡夫ノ事ヲ修シ、其勢ニ乗シテ直ニ元品ノ無明ヲ断シテ妙覺ノ位ニ登ル、喩ヘハ一丈ノ堀ヲ超ユルニハ、其岸ヨリ直ニ超ユルコト能ハス、遙カニ五丈モ十丈モ後ヘ戻リテ、其ヨリ急ニ走リ、其走ル勢ニ乗シテ直ニ飛越ルカ如シ、之ヲ入重玄門ト云フハ、後位ノ顯理明瞭ナルニ望テ、凡夫ノ方ヲ玄門ト名ク、或ハ又理体ヲ指シテ玄ト名ク、此時ハ等覺ノ菩薩、妙覺ノ原<sup>23</sup>理ニ入ルヲ入重玄門ト名ク、然レトモ此ハ重ネテ倒修凡事ノ玄妙ノ法ヲ修スルコトナリ、此ニ付、此入重玄門ハ別円二教ノ等覺ノ位ニアリト雖、其別アリ、別教ニハ元品ノ無明難断ノ故ニ入重玄門アリ、円教ニハ遍応法界ノ故ニ入重玄門アリ、

五十九義 性具染惡

三十丁右、妙宗鈔ヲ引テ、別人不智本覺之性具染惡徳トアリ、此ハ別教ノ人ハ性惡ノ法門ヲ智サル故ニ、円融ノ妙理ヲ智ルコト能ハス、今ノ文ニ本覺ノ性ヲ染惡ノ徳ヲ具スト云ハ、円覺<sup>(24)</sup>ニ談スルトコロノ性惡ノ法門也、此ハ他宗ニハ嘗テ之ヲ談セス、他宗ニハ性ニ善ヲ具スルコトヲ明セトモ、性ニ惡ヲ具スルコトヲ智ラス、然ルニ善惡共ニ修性ノニアリ、斷惑証理ト云テ斷セラルゝ惡ハ修惡也、性惡ハ仏ニモアリ、此仏ニ性惡アリト云フハ、天台ノ中ニアリテモ山家正統ノ説ニシテ、山外ニハ之ヲ許サス、然ルニ性惡不斷ト云ハトテ惡ハヨキ者ニアラス、円融ノ妙理ヲ智セントテ頂ク惡ノ方ニ談スレトモ、善モ無記モ性具ナリ、此性惡トハ其體惑業等ニテ、惑業ハ理性本具ノ徳ナレハ、理性ノ外ナシト云フコトナリ、其故ハ本覺ノ理性ハ縁ニ随テ能ク物ニ応スルモノ故、惑ヘハ惑業苦ノ三道トナリ、悟レハ法報応ノ三身ト顯ハル、其體別ナシ、三觀義ニ苦道七支ハ、則チ正因仏性。煩惱道ノ三支ハ則チ之也、性仏性業道ノ二支ハ、即チ是縁因仏性トアリ、吾人ノ日夜ノ有様、生死ノ苦果ノ當體即チ正因仏性ナリ、貪瞋等ノ煩惱ノ當體即チ縁因性也、善惡業ノ當體則チ縁因仏性也、此レ惑ノ凡夫ニアリテモ三因仏性ノ修用ハ顯レテアリ、此ノ如ク三因仏性ハ一體ノ三法互ニ円融シテ、而モ修徳ノ用ヲ起シテアレハ、仏性ガ惑業ニ蔽ハルゝト云フコトハ決シテナキコトナリ、惑業ノ當體即チ縁瞭ノ仏性ナレハ、仏性ガ仏性ヲ蔽フ道理ハナキ也、之ヲ以テ性具之功功在性惡ト云テ、円頓ノ深理ノ顯ルコトハ性惡ヲ明スニアリ、此ニ付、初心ノ修業ト仏果ノ功用トニ付テ此義ヲ智ルヘシ、妙樂ハ未聞性惡之名安能信有性徳之行ト釈シテ、性惡ノ理ヲ智サレハ、今日ノ修行力有作ノ修行ニシテ、無作性徳ノ行トハナリカタシ、其故ハ修惡則性惡ト智サレハ、惑智ノ不同力立テ惑ハ破シ理ハ顯ル、故、修行力有作トナル、然ルニ今日念々起ル修惡迷心則法性之理ニシテ、性惡ナリト智レ

ハ、破スベキ惑モナク顕ハスヘキ真理モナシ、之ヲ無作ノ業ト云フ、無作ノ業ト云ハ修行セサルコトニアラス、終日修行スレトモ修行ノ功ニ目ヲカケサルコトナリ、次ニ仏果ノ功用ニ約ストハ、性惡若斷普現色身從何而定ト釋シテ、仏果ノ体ニ固ヨリ九界ノ惡ヲ具スルカ故ニ、具スルトコロノ九界ヨリ明鏡ノ動セスシテ、色像自減スル如ク、自然ニ九界ノ身ヲ現シテ衆生ヲ濟度スル也、此モ別教ニテハ、仏ノ神通ヲ以テ鬼畜等ノ身ヲ現シテ化益スト雖、其様不手弱キコトニアラス、仏モ性惡不斷ナレトモ自在ニ變化スルナリ、然ルニ性惡ヲ斷セシ故ニ、水禽ノ水ニ入りテ羽ヲ濕サヽル如ク、更ニ汚サレサル也、前来弁スル處ハ円教ノ性惡ノ法門也、然ルニ別教ノ人ハ此性惡ノ法門ヲ智サル故ニ、染惡ノ惑業ハ本覺ノ理性ニ具シテアル徳ト云フヲ智ラス、之ヲ性ノ外ノモノト思フ故、因ヨリ果ニ向フトキハ緣了ノ二仏性ヲ修シテ、本有ノ法觀ヲ顯サルヽ可ラス、故ニ緣了ノ二仏ニ由テ本具ノ正因仏性ノ法身ヲ悟リ顯ハスコトニナル故、修性不二ノ理ニ及ハサル也

#### 六十義 円教ノ教意

三十一右以下円教ヲ明ス、此円教トハ、八教ノ中ノ円教ナリヤ超八ノ極円ナルヤト云フニ、今円昔円円体無二<sup>(25)</sup>ナルカ故ニ、教体ニ約スレハ八教ノ中ノ円教ヲ撰ス、華嚴ノ法界広廣大難門ノ入不二法門等ヲ撰スルコト疑ヲ容レス、然ルニ今明ストコロノ円ハ、法華開顯ノ極円ニ約ス、其義ハ八教大意ニ、華嚴法界廣大淨名入不二法門ト並ニ円妙ノ法ナリ、今仏意ニ從テ卷權歸実開顯之円粗騰綱要トアリ、今ノ所明之ニ準シテ智ルヘシ、凡ソ此円教ノ教意ハ円融相即ヲ明ス、之ト円トハ不偏ノ義ナレハ、不偏ノ義ニテ前三教ニ於テハ、迷悟因果ノ法ガ偏リテ迷法ハ迷ニシテ悟法トハ別也、悟法ハ悟ニシテ迷法ニアラス、因ハ因。

果ハ果ト法ガ偏リテ別ニナルヲ偏ト云フ、今円教ニハ偏リタル法ハ更ニナシ、迷モ悟モ鬼モ佛モ法ノ自性ニシテ理性本具ノ徳ナレハ、一法ヲ挙レハ一切ノ法ヲ具ス、此ノ如ク諸法円融シテ自在ナルヲ円教ト云フ、其円教所明ノ法ヲ当段所引ノ四教義ニ、不思議因縁等トアリ、此不思議因縁ト云ハ、因縁生ノ法ハ本来性具ノ徳ナレハ、其体融妙ニシテ絶待ナルカ故ニ、一念ノ心法ニモ三千ノ徳ヲ具シ、一色一香ニモ三千ノ徳ヲ具シテ、円融不思議ノ妙法ナレハ此ハ仏智見ヲ開カサレハ法ノ自性ニ叶テ照ラスコト能ハス、九界三教ノ人ノ計リ知ルトコロニアラス、故ニ不思議因縁ト云ナリ、次ニ二諦中道トハ、空假ノ二諦即中道ニシテ、三諦円融不思議也、前ニ述タル如ク一切法ノ上ニ破情、立法、絶待ノ徳ヲ具シテアルユヘ、何レノ法モ皆ナ不思議ノ妙法也、之ヲ以テ不思議ノ因縁ハ事、不思議ノ三諦ハ理、因縁ノ事ト三諦ノ理ト互ニ相具シテ別ナラサル故、之ヲ事理具足不別ト云也、

#### 六十一義 円教ノ名義

三十一左、円ノ名ヲ釈スルニ、円妙円満等ノ四義ヲ挙テアリ、三諦円融不可思議名円妙トハ、前ニ云カ如ク、三諦ハ天然ノ性徳ニシテ、三千ノ諸法ノ上ニ破立絶待ノ三徳ヲ具シテ、而モ其三諦円融シテ破情ノ空ニモ立法絶待ノ徳ヲ具シ、立法ノ假ニモ破情絶待ノ徳ヲ具シ、絶待ノ中ニモ破情立法ノ徳ヲ具シテ、三諦円融シテ一諦トナリ、三諦ノ徳ヲ具セサルモノナキ故、不可思議也、之ヲ円妙ト云フ、次ニ三一相即等トハ、三諦即一諦ナレハ空ヲ挙テモ破立絶待ノ徳ヲ具シテアリ、假ヲ挙テモ破立絶待ノ徳ヲ具シテアリ、中ヲ挙テモ破立絶待ノ徳ヲ具シテアリ、又一諦即三諦ナレハ、此又何レヲ挙テモ一<sup>26</sup>諦ノ徳ヲ具シテ隠ルトコロナシ、故ニ円満ト云フ、次ニ円見事理一念等トハ、円教ノ人ハ名字即ノ位トナリ、一念ノ心ニ事造

ノ三千理具ノ三千ノ具スルコトヲ照ラス、故ニ円足ト云フ、次ニ体非漸成トハ、真理ノ体ハ一念ニ具スル故ニ、修性ニ前後漸成アルニアラス、故ニ円教ノ人ハ初心ノ位ヨリ性ノ尽力修ト顕ハル、故ニ供仏作善等ノ行モ法ノナストコロニシテ、人ノ修成ヲ借サル故、法界ノ行也、何レノ行モ法界ノ全体ニシテ、漸々ニ修成セサル故ニ、初後不二ニシテ、初心ノ行ノ初住以上ノ<sup>27</sup>行モ差別ナキカ故ニ、円頓ト云也、

## 六十二義 入不二門

世二右、諸経ノ中円教ノ法門ヲ説ク文ヲ挙ルニ付、浄名経ノ入不二法門ヲ出ス、不二法門トハ、諸法融通シテ偏依スルトコロナキ絶待ナル中道ノ理ヲ指ス、此ハ維摩経ノ入不二法門品ニ初メ、三十一ノ菩薩各入不二法門ヲ説クハ、円教ノ住行向地ノ四十位ヲ表ス、則チ三十ノ菩薩ハ住行向ノ三十位ヲ表シ、一菩薩ハ十地ヲ合シテ一トス、次ノ文殊ノ不二法門ヲ説クハ、等覺ノ位ヲ明ス、次ノ維摩ノ不二法門ヲ表スハ、妙覺ノ位ヲ表スル也、此赴ハ浄名（維摩ノ事）ノ疏九ノ卷三十八丁ニ釈アリ、此ニ付、三十一菩薩ト文殊ト浄名ト、何レモ不二ノ法体ヲ顕スニ差別アリ、其故ハ、三十一菩薩ハ迷悟因果等ノ法ニ付テ、不二ノ法体ヲ顕ハス、之ヲ以有言謂無言ト釈ス、則チ生滅垢浄等ノ言説ヲ施シテ、此法不二ナリト云フ道理ヲ説キ述ルコト也、次ニ文殊ハ法ヲ離レテ不二ノ法体ヲ顕ハス、之ヲ以無言謂無言ト釈ス、即チ一切法ハ無言無説ト標シテ、更ニ善トモ不善トモ言説ヲ施サシテ、不二ノ法体ヲ説顕ハスコト也、次ニ浄名ハ言説ヲ離レテ不二ノ法体ヲ顕ハス、之ヲ以無言無言ト釈ス、前ノ文殊ハ、一切法ハ無言無説ヲ言説ヲ施セトモ、浄名ハ少シモ言説ヲ施サシテ黙スル故ニ、言説ヲ離レテ不二ノ法体ヲ顕ハス、之ヲ維摩黙不二ノ法門ト云フ也、第二期滅業四十一ヨリ六十マテ、偶数三ニ円接別トハ、別教ノ人カラ不但中ヲ見ルハ、不智ヘ円教ニ

入  
ル  
ト  
コ  
ロ  
ナ  
リ



三十四丁左、随喜品ヲ明スニ、初メニ所随喜ノ妙法ニ約シテ、妙解ヲ立ルコトヲ明ス、文ニ妙法者即是心トアリ、然ルニ此妙法トハ、具ニハ次下ニ出ル三法妙也、心仏衆生ノ三法何レモ十界三千ノ諸法ヲ具スルカ故ニ、妙法ト名ルナリ、此三法妙ハ無差別ナレトモ、衆生法ハ甚タ廣ク仏法ハ甚タ高シ、故ニ初学ノ行者易ク觀シ難シ、故ニ現前念々起滅スル我心ニ付テ、三諦ノ妙理ヲ觀スルヲ易シトス、故ニ今我一念ノ妄心ヲ所随喜ノ妙法トス、此ハ熱イ寒イト思フ一念ノ妄心ノ起ルハ理性ノ具德ニシテ、真如ノ自性ヲ守ラスシテ、縁ニ從ヒ物ニ応スル德ナレハ、此一念ノ心ノ動スル当体即チ三千三諦ノ妙法也、之レカ法界ノ全体ナリト云フ道理ヲ深ク信解シ、其ヨリ三觀ヲ修シテ妙心ノ体ヲ開發スル也、妙心体具トハ、一念ノ心体ニ三千ノ諸法ヲ具足シテ、鬼モ仏モ出ル故ニ、靈妙不思議也、八教大意ニハ、妙心体具々不出心猶如金体具足衆器具不出金トアリ、此因心本具ハ天台別途ノ法門ニテ、華嚴ノ果海融通ヲ談スルトハ異ナルトコロナリ、華嚴ニ談スルカ如キ諸法相即主伴互融ハ、強チニ晋覽ノ行ヤ舍那ノ果德ニ限ルコトニハアラス、皆ナ之レ惑ノ衆生ノ因心ニ具スルトコロナリ、故ニ金鉉論ニ毘盧ノ心<sup>28</sup>土不逾凡下ノ一念トアリ、然レハ華嚴ノ上ニテ廣博ニ説出ス、舍那ノ果德ハ皆之レ衆生本具ノ德ナリト説顯ハスカ、法華ノ十如十<sup>29</sup>相、三千三諦ノ法門也

六十四義 三法無差別

三十四丁左、華嚴ノ心仏及衆生是三無差別此心即空即假即中ノ文ヲ引クハ、次上ニ妙法ノ体ヲ近ク自己ノ妄心ニ付明セシ故、此心ニ離レサル仏ト衆生トアルコトヲ示サンカ為ナリ、然ルニ此經文ハ華嚴ト天台ト解釈ノ異ナルトコロニテ、華嚴ニ於テハ三法ノ中心ヲ能造トス、仏ト衆生トヲ所造トシテ三無差別ヲ談ス、華嚴疏鈔ニ心是總相悟之名仏成淨緣起迷之為衆生成染緣起一心以真為体トアリ、之レ三法ノ中ノ心ヲ總相トシ、而モ心ノ体ヲ法性ノ真心ト定メテ、此心迷ハ衆生トナリ、此心悟レハ仏トナルト立ツ、探玄記ニ出タリ、天台ニモ山外ノ説ハ此華嚴ノ説ニ同シテ、三法ノ中、心ハ理、生仏ハ事、心ハ能造、生佛ハ所造トス、故ニ心ハ唯能造トナリテ所造ニ通セス、生佛ハ唯所造トナリテ能造ニ通セルカ故ニ、之レ三無差別ノ經意ヲ失セリ、然ルニ山上正統ノ説ハ、三法各々事理ヲ具シ、三法不可思議ニシテ互ニ能造所造トナルヲ無差別ト名ク、故ニ集註三十六左ニ引ク十義書ニ云ク、以我一念心法及一切衆生十方諸佛各々論於事造人ニ説於理具而皆互具互攝方名三無差別トアリ、之レ三法ニ各事造ノ三千理具ノ三千ヲ具シテ、互具互攝スルヲ三無差別ト名クルナリ、猶此事理ノ三千ノ事ハ後ニ至リテ智ルヘシ

六十五義 心即三諦

三十六左、此心即空假中トハ、能隨ニ約シテ妙行ヲ立ルコトヲ信解シテモ、妙行ヲ立テ、妙觀ヲ修サレハ、其妙心ノ体ヲ顯ハスコト能ハス、故ニ今能隨喜ニ約シテ一心三觀ノ妙行ヲ立ル、其中境觀ヲ標スル一段也、此心トハ上ノ一念ノ妄心也、此ハ所觀ノ境也、即空即假即中トハ能觀ノ一心三觀也、此一念ノ妄心ノ当体

ニ三千ノ法ヲ具シテ、即空即假即中ナリト觀スルニ由テ、妙心ノ体力顯ハル、也、此三觀ノ初メニ皆即ノ字ヲ置クハ、一念ノ心体即三諦ナリト觀スルコトニテ、即トハ妄心ノ当体ヲ指ス、集註三十六左ニ引ク拾遺記ノ文ニ、偏空トハ假中ニ對スル空也、円空トハ三諦相即ノ空也、此心即空ト觀シタル外ニ假中ノ二諦ヲ遺サズルヲ円空ト云フ、次ノ偏假妙假但中俱徳中準シテ智ルヘシ、元来一家ニハ三諦ハ俱体俱用ト立テ、空ヲ体トスレハ假中ハ用トナリ、假ヲ体ヲスレハ空中ハ用トナリ、中ヲ体トスレハ空假ハ用トナル、故ニ空ヲ挙テ諸法空ナリト觀スレハ、一空一切空ニシテ假中トシテ空ナラスト云フナシ、此レ総ノ空觀也、假ヲ挙テ諸法假ナリト觀スレハ、一假一切假ニシテ空中トシテ假ナラスト云フナシ、之レ総ノ假觀也、中ヲ挙テ諸法中ナリト觀スレハ、空假トシテ中ナラスト云フナシ、之レ総ノ中觀也、一即三諦ニテ即一ト觀スル也、之レ一心三觀ノ妙行相也

## 第六十六 境智亡立

此ハ三十七右ノ所明ニテ、境智俱亡境智俱立ノ略名也、境智俱亡トハ、境ト智ト其体一ナルカ故ニ、冥合シテ能所ノ立タサルコトナリ、即チ本文ニ常境無相常智無縁トアリ、常境トハ三諦ニシテ、此ハ別ニ智慧ニ對セスシテ、而モ自然ト常ニ智慧ニ照サル、境ト云フナリ、常智トハ別ニ境ヲ照サントセスシテ、而モ自然ニ常ニ照ラス智慧ト云フナリ、此諦ト觀トハ名異体同ニシテ、境ト智ト名ノ異ナルノミニシテ体ハ一也、凡テ一体ノ上ニ能所ハ立タサルモノニテ、能所ノ別ル、モノハ其体別也、假令ハ太陽ト萬物トハ体別ナルカ故ニ、能照ト所照トナル、又太陽ノ体ト光トハ体一ニシテ、太陽ノ体ノ輝ルノナレハ、太陽ノ体ガ所照トモナラス光ガ能照トモナラス、今三諦三觀ハ太陽ノ体ト光トノ如ク、其体一ニシテ別ナキカ故ニ、

三諦ノ境ハ三觀ノ智ニ縁セラル、相ナキ故ニ無相也、又三觀ノ智ハ三諦ノ境ヲ縁スルト云コトモナキ故ニ無縁也、故ニ常境ハ無相、常智ハ無縁也、此レ境智俱亡也、次ニ無縁而縁無非三觀無相而相三諦宛然トハ、境智俱立ニシテ境智体一ナレトモ、所縁能縁ノ義アルコト也、假令ハ太陽ハ自体ヲ照ラスモノニアラスシテ、而モ自然ト常ニ自体ヲ照ラスモノ也、太陽ガ自体ヲ照セハコソ、太陽ノ自体カ明カニ顯レテアリ、於此常智ノ常ノ字ノ意味ヲ智ルヘシ、燈ト物トハ体別故、照ラストキト照サル、トキトアリ、太陽ノ体ト光トハ体一故ニ、常ニ自体ヲ光シテ明ハス、今諦ト觀ト其体一ナルカ故ニ、三觀力起レハ自然ト常ニ三諦ヲ照ラス故ニ常智ト云フ、又燈ノ物ヲ照スハ、体ノ異ナルモノヲ以テ出テ、ワザク照ラス故ニ、自体ニ叶テ照ラスコト能ハス、太陽ハ光ト体ト一ニシテ、而モ別ニ自体ヲ照サントセサル故ニ、自体ニ叶テ照ラス、今無縁ニシテ縁スルト云モ然リ、境智体一ニシテ、三觀ノ智ハ別ニ三諦ヲ境トシテ縁セス、無縁ニシテ而モ縁スル故、実ニ体ニ叶テ照ラス、故ニ常ニ智恵ハ境ノ体ニ叶テ三觀トナル、故ニ無非三觀ト云フ也、次ニ無相ニシテ相トハ、太陽ノ自体ハ光ニ照サル、モノニアラスシテ、而モ常ニ自然ト光ニ照サレテ自体カ顯レテアリ、於此常境ノ常ノ字ノ意味ヲ智ルヘシ、燈ト物トハ体別ナルカ故ニ、燈ヲ以テ来ラサレハ照スコト能ハス、太陽ノ体ハ光ノ<sup>30</sup>別ノモノニアラス、常ニ離レサルモノ故ニ、常ニ自然ト光ニ照サレテ体カ顯レテアリ、今三諦ハ三觀ト体一ニシテ離レサル故ニ、三觀ノ智力起レハ常ニ自然ト照サル、故ニ、常境也、又太陽ノ体ハ光ニ照サルヘキニアラサルモノカ照サル、故ニ、実ニ自体ガ明々顯レテアリ、今無相ニシテ相ト云モ然リ、三諦ハ照サル相ノナキモノカ照サル、故ニ、実ニ三諦ノ境ハ三觀ノ智ノ為メニ境トナル故ニ、三諦宛然ト云也

三十七左ニ、外以五悔勤加精進助成理解トアリ、前来三觀ヲ以テ三諦ヲ觀スル理觀ヲ明シ了リテ、此ヨリ下五悔ノ助行ヲ明スユヘンハ、初心ノ行者ハ假令理觀ヲ修シテモ、我身二十惡五逆等ノ罪障アルカ故ニ、其業惑ニ障レテ理觀成シ難シ、故ニ懺悔ノ行ヲ明シテ罪障ヲ懺悔シテ、理觀ヲ助成スルコトヲ述フ、其五悔ノ中、第一懺悔ニ理事ノニアリ、集註ニ止觀ヲ引ク如ク、事相ノ懺悔ハ苦道業道ノ事障ヲ懺悔シテ破シ、理觀ノ懺悔ハ煩惱道ノ障ヲ懺悔シテ破ス、惑ノ苦果ハ有情ヲ悩スル事ノ障也、由テ事相ノ懺悔ヲ以テ破ス、又三惑ハ三諦ノ理ヲ障ユルモノ也、由テ理觀ノ懺悔ヲ以テ破スル也、次ニ理事ノ二ノ懺悔ヲ開テ、無生、取相、作法ノ三種ノ懺法トス、無生ノ懺悔トハ、直ニ罪障ノ法体ニ通達シテ、修惡乃チ性惡ニシテ尽ク本具ノ理ノナストコロナレハ、罪障即無生也、之ニ由テ罪障ト顯ルゝモ功德ト顯ハルゝモ、皆之レ法性ノ縁ニ從フ徳也、然レハ体ニ別ハナシ、然レハ罪障ノ当体即チ三千ノ事<sup>31</sup>相ナリト觀シ、罪障功德ノ隔ヲ亡シテ、善惡ノ相ヲ見サルカ無生ノ理懺也、次ニ取相ノ懺悔ハ、心ヲ靜ニシテ仏菩薩ノ勝相ヲ觀得シテ、滅罪ノ印ヲ取ルコト也、次ニ作法ノ懺悔トハ、仏制ノ法度ニ從テ懺悔スルコト也、然ルニ此三種ノ懺悔法ノ中、正助アリ、無生ハ主ニシテ正也、餘ノ二ハ伴ニシテ助也、之ニ付、集註三十九右ニ明ス懺悔處トハ、道場ノ事ニハアラス、觀ヲ起ス所依ヲ明ス、乃チ三諦ノ理ヲ以テ懺悔ノ所依處トスル也、此三觀ノ理ニ依テ起ルカ故也、然ルニ其三諦ノ妙理ハ何レニアルゾト云フニ、遠ク求ルニ及ハス、事々物々三諦ノ理ナラサルハナシ、之ヲ廿九左ニ、然懺悔處誰人不具何法暫非但為本迷滿目不見全心不知ト云ヘリ、此ハ総シテ迷事ヲ處トスルコトヲ示ス、次ニ四十丁右ニ、亦懺之所依如器淳朴非砧不成以何為玷謂一実相トアリ、此ハ別ノ罪相ヲ處トスルコトヲ示ス、日夜ニ作ル罪相乃チ三諦ノ実相也、次ニ喩ヲ挙タリ、能觀ノ智ハ槌ノ

如ク、所觀ノ実相ハ砧ノ如ク、罪相ハ淳朴ニ似タリ、其实相トハ則罪相ニシテ別体ナシト示ス、之レ凡夫ノ罪相ト実相トハ別ナリト心得ルモノヲ悟サンカ為也、以上辦セシ所ヲ指南トシテ、事理懺悔ノ相ヲ解釈スヘシ

#### 六十八義 即ノ字ノ義理

四十三左、若纔聞生死即涅槃煩惱即菩提即心是仏不動即到不加修習便成正覺者十方世界尽是淨土觸向對面無非覺者トアリ、理ヲ執シテ行ヲ廢スル者ヲ戒ムル一段ニシテ、凡ソ煩惱即菩提生死即涅槃トハ、円頓行者ノ發心立行ノ体格ナレトモ、之ヲ惡ク執スレハ斷惑証理ノ修造ヲ勞スヘカラスト、終ニ修行ヲ廢スルニ至ル、此義ヲ審ニスルニハ理事ノ別ヲ智ルヘシ、其故ハ、理性ニ約スレハ煩惱生死ノ当体即菩提涅槃ニシテ、平等無差別也、本ト法ハ縁ニ從テ種々ノ働ヲナスモノナレハ、法体ヲ論スルトキハ地獄ノ罪人モ三千ノ法体也、妙覺ノ仏陀モ三千ノ法体也、氷ト水トハ同体ナルカ如シ、更ニ斷餘翻轉スルコトヲ用ヒス、又事用ニ約セハ迷悟染淨ノ別アリ、氷ハ凝結シ水ハ流動スル如シ、故ニ六則ノ階位ヲ立テ、斷迷証理セシムル也、之ヲ以テ即ノ字ニ三義アルコトヲ智ルヘシ、一二二物相合、此ハ体別ニシテ相離レサルヲ即ト名ク、通教ノ真俗相依離レサル如シ、二ニ背面相翻、此ハ性一ニシテ相異ナルヲ即ト名ク、別教ノ撰相歸性ノ如シ、三ニ当体全是、此ハ円教ノ相ニ即シテ性ヲ顯スヲ云也、此三義ノ中、初二ハ他宗ノ所談第三義ハ天台ノ極意也、故ニ今当体全是ノ即ヲ用ユルナリ、然ルニ此即ノ言ハ離ノ義ヲ顯ハス、集註四十三左、凡言即者以顯於 離如水不離水理須融氷義同於離トアリ、氷ト水トハ体一ナレトモ、温度ノ差ニ由テ用ヲ異ニスルカ故ニ、氷ヲ融セサレハ水用ナキカ如シ、故ニ即ノ言ニ離ノ義アリト云フ、即ト云フハ体ハ一ナレトモ

用ヲ異ニシテ離ルゝ辺ガアル故ニ、体一ナルコトヲ智セントテ即ト云フ、若シ離ルゝ辺カナケレハ即トハ名ケス、氷即水トハ言ハサル如シ、然レハ煩惱即菩提ト云フハ、体ハ一ナレトモ離ルゝ辺ノアルコトヲ顕シタル言也、之ヲ以テ煩惱即菩提ト開バ、觀行ヲ修シテ情ヲ轉シテ智トナサレハ、仏果ハ証シカタシト智ルヘシ、然ルニ僅ニ即空ノ言ヲ開テ即チ修行ヲ廢シテ即ノ字ノ主意ヲ智ラス、誤テ即ノ名ヲ説カハ、何異怪鼠作啣々声ト戒ムルトコロナリ

### 六十九義 三惑同斷

五十二右、円教ノ斷惑ヲ明ス、此ハ円教ノ心ハ能治ノ三觀已ニ一心也、所治ノ三惑如何デカ前後異時斷ナランヤ、故ニ三惑同體三惑同時斷ト云ガ決着ノ正義也、三惑同體ト云ハ、三惑ノ惑體ハ一妄情ニシテ惑ノ働ニ顯中細ノ別アルノミ、故ニ三惑ノ挙體ガ界内ノ生死ヲ引ク其用ヲ見思ノ惑ト云フ、故ニ此見思ハ通シテ三諦ノ理ヲ障ル也、前三教ノ見思ノ惑ガ、只偏真ノ理ヲ障ルニハ同カラス、次ニ三惑ノ挙體ガ化道ヲ障ル中ノ用ヲ、塵舍ノ惑ト云フ、故ニ塵舍ノ惑モ通シテ三諦ノ理ヲ障ル也、前三教ノ塵沙ノ惑只俗諦ヲ障害ルニハ同カラス、次ニ三惑ノ挙體ノ界外ノ証<sup>32</sup>ヲ引ク細ノ用ヲ、無明ノ惑ト云フ、故ニ無明ノ惑モ通シテ三諦ノ理ヲ障ル也、別教ノ無明ノ惑ガ担中ノ理ヲ障ルニハ同カラス、何故ナレハ、円教ノ心ハ所障ノ三諦ハ融即シテ、三諦即一諦ナルカ故ニ、能障ノ惑モ相即シテ三惑同體也、然ルニ其同體ノ三惑ニ顯中細ノ別ルゝユヘンハ觀智ノ親疎ニ由ル、五十一左ニ引クトコロノ指要鈔ニ明スカ如ク、觀智ノ功力ニ微著ノ別アリテ、智力ノ微劣ナル間ハ三諦ノ理ニ疎シ、智力ノ顯著ニ至レハ三諦ノ理ニ親ク適フ様ニナル、其觀智ノ親疎ニ由テ三惑ガ別ルゝ、惑體ニ別アルニアラス、假令ハ三觀ノ智ハ太陽ノ光ノ如ク、三惑ノ情ハ暗夜

ノ如シ、三觀ノ光ハ理具ノ法界ヲ輝シ妄情ノ暗ヲ破スルモノ也、然ルニ元ト暗ニ別体ハナケレトモ、太陽ノ光ノ直用ニ強弱アルカ故ニ、自カラ暗ニ翻細ノ別アルカ如シ、然レハ三惑ノ暗ノ翻中細ハ、只三觀ノ光ノ理ヲ輝ラス強弱ニ由ルノミ、別体ハナキ也、当段ニ翻惑先ツ落トハ、最初ニ翻キ妄情ノ暗ノ霽ルゝコトニニテ、其見思ノ翻惑ト云ハ、即チ其体三惑ナレハ三惑同時断ノ義ナリト智ルヘシ

## 第七十 五住地義

五十三右、永嘉太<sup>(33)</sup>師云同除四住、此ハ固ト勝鬘經五住地ノ惑ヲ説ケリ、一二見一處住、二ニ欲愛住地、三ニ色愛住地、四ニ無色愛住地、五ニ無明住地ナリ、法相ニハ此五住地ノ中、四前住地ヲ煩惱障ノ種子トシ、第五ノ無明住地ヲ所智障ノ種子トス、天台ニハ前ノ四住地ハ三界ノ通惑也、第五ノ無明住地ハ界外ノ別惑也、其四住地トハ見<sup>(34)</sup>思ノ煩惱ニテ、一聚頓断三界ノ見惑ヲ合シテ一トシテ、見一處住地ト云フ、又漸断ノ三界ノ見惑ヲ開テ次ノ三住地トス、思惑ニハ貪瞋癡慢アレトモ、貪愛ハ思惑ノ本ナルカ故ニ愛ノミヲ出ス、第五ノ無明住地トハ、四十二品ノ無明ヲ合シテ一トスルナリ、此中、総テ内外ノ塵沙ヲモ含スルナリ、之レヲ假<sup>(35)</sup>地ト名ツクルハ、大乘義章二本為末僻名之為住本能生末称之為地トアリ、然レハ住地トハ諸惑ノ根本ナルコトヲ顯ハス、草木ノ枝葉ノ樹ニヨリテ地ニ依ラサルカ如シ、無明ハ根本ニシテ大地ニヨリテ住スルカ如シ、然レドモ五住共ニ無明ノ辺ニ約シテ住地ト名ツクルナリ、之ニ付キ、此同除四住ノ門<sup>(36)</sup>ハ妙玄ノ位妙ヲ明ス文ナレトモ、妙玄ニ曰クトハ云ハズシテ、殊更ニ永嘉大師曰ト名ノリタルハ、台教ノ復興ハ此文ニアルコトヲ知ラシメントテ、記念ノ為メニ永嘉集ニ移シテ引タルコト集註ニアルカ如シ



第七十一 三徳義相

五十四右ニ明カス所ノ法槃<sup>(37)</sup>解ノ三徳ノコトハ、上巻以来屢出タルコトニシテ、其本涅槃經ノ説ナリ、此ハ衆生本有ノ性徳ナレハ、三徳秘寮藏<sup>(38)</sup>ト名ツクルナリ、此三徳ハ、大涅槃ノ果体ノ上ニ具スル所ノ無量ノ徳ヲ束テ三徳トスルナリ、是レハ迷中ノ煩惱業苦ノ三障カ、果土ニ至リテ三徳ト顯ハルヽナリ、法身ト云ハ、法体融即シテ一法ニ一切法ヲ攝ムル徳ナリ、般若トハ、情ヲ離レテ明カニ理体ヲ照ス智慧ナリ、解脱トハ、物ニ応シテ自在ニ衆生ヲ濟度スル徳ナリ、此三ニハ常樂我淨ノ四徳ヲ具スルカ故ニ、三徳ト言フナリ、此三徳ノ次第ニ付キ、通例ハ法般解ト次第スレトモ、今ハ解般法ト次第ス、是レハ義門ノ不同ニシテ法解般<sup>(39)</sup>ハ体用ノ次第ナリ、其故ハ法身ハ本有ノ理体、般若解脱ハ其本有ノ理体上ノ作用ナリ、又般若ト解脱トヲ相望スレトモ般若ノ徳ハ果体ナリ、解脱ノ徳ハ其報身ノ果体ノ物ニ応シテ自在ニ度生スル応用ナリ、次ニ解般法トハ、逆次ニ連ネタル資發ノ次第ナリ、其故ハ三因佛性ノ中、初住ノ位ニハ先ニ縁因仏心開發シ、次ニ了因仏性ノ慧心開發シ、次ニ正因仏性ノ理心開發スルナリ、此三因仏性ハ因行ナルカ故ニ、資發ノ次第ヲ以テ縁了正ト連ネタル者ナリ、次ニ此三徳ハ別教ト異ナリテ不縦不横ナリ、釈籤ニ明カスカ如シ、二修一性ヲ即スルカ故ニ不縦ナリ、一性二修ヲ有スルカ故ニ不横ナリ、一応別テハ三徳ノ中、法身ハ本有ノ理性ナレトモ、般若解脱ノ修成ノ二徳をヲ具セリ、又修成ノ二徳、法身ノ徳ニ即スルナリ、之レニ付キ、法般解ノ三徳ハ剋実スレハ各修性ノニアリ、性ノ尽力修トアラハレ修ノ尽力性ナリ、之レヲ十不二門全性起修全修在性ト云フナリ、又修二性一修性各三ト言フコトアリ、般解ノ二ハ修徳ナリ、法身ハ性徳ナリ、又全性起修ナレハ修性共ニ三徳アリ、此修二性一ハ別円ニ通シ、修性各三八円教ニ限ルナリ、是等ノ趣キ八十不二門ノ中、修性不二門ニ付テ知ルヘシ

## 第七十二 三因仏性

五十四<sup>(40)</sup> 左ニ明カス仏性トハ、涅槃經ニ一切衆生悉有仏性トアリ、金篋論ニハ一切衆生悉有果人三性トアリ、其一切衆生ニ具シタル果人ノ性トハ如何ナルモノナルヤト云フニ、則チ惑業苦ノ三道ノ事也、此三道ガ初住以上ニ至レハ、法般解ノ三性<sup>(41)</sup>ニ現レテ勝レタル働ヲ起ス、故ニ妙樂ノ釈、迷則三道流轉、証則有果中勝用トアリテ、結ヘハ氷トナリ解レハ水トナル如シ、然レハ一切衆生悉有性ト云ヘハトテ、別ニ胸中ニ光輝アルモノニアラス、因果ノ法体別ナキコトナリ、故ニ常住仏性ノ理ト名クルナリ、此仏性ニ付、仏性論ニハ住自性仏性、引出仏性、至得果仏性ノ三仏性ヲ説ケリ、天台ニハ法華ニヨリテ正了縁ノ三因仏性ヲ立ル、略シテ云ハ、正因仏性トハ真如実相ノ理也、了因仏性トハ其真如ノ理ヲ悟ル能証ノ智也。縁因仏性トハ六度万行等也、之ヲ玄義ニハ正了縁ノ三因仏性ヲ次第ノ如ク、真性軌、觀照軌、資成軌ノ三軌ニアテ、アリ、此三因仏性ハ前ノ三徳ト同シク、修二性一修性各三ノ義アリテ不縦不横也、五十四丁ニ引ク所ノ妙宗鈔ノ文ニ付テ智ルヘシ

## 七十三義 初心成覺

(華嚴ハ果□純粹真理ヨリ始メ、天台ハ因□雜染ノ因心ヨリ始ム) 五十五右ニ引クトコロノ華嚴ノ文ニ、初發心時便成正覺トアリ、此ハ初住以上ハ分証仏果ナルカ故ニ、仏ノ威儀ヲ具シテ、八相作仏ノ応用ヲ垂ル、ヲ便成正覺ト云フ、此ハ妙覺果滿ノ仏ニハラス、玄義ニ從十住去名信<sup>(42)</sup>因妙覺名真果トアリ、次ニ謂成妙覺諺之甚トハ、他師ノ過ヲ破ス、此義ハ五教章下十七丁、心<sup>(43)</sup>滿成仏ノ義ヲ立テ、十信ノ滿心

ニ進テ妙覺ノ極果ヲ得ルトアリ、元ト此十信ノ滿心ハ、無明ヲ斷シテ初住ノ位ニ入ルトキ也、此時ニ一位  
ニ一切位ヲ撰メテ仏果ノ功德ヲ得ルト云ガ、賢首家ノ説也、然ルニ此華嚴ノ如キハ、心<sup>(44)</sup>滿成佛初住即  
極ト立テ、十信ノ終リニ無明ヲ斷スレハ理ニ因果ノ別ナキカ故ニ、智ニ明昧淺深ヲ論セス、初住即仏果  
也、住上ノ諸位ヲ明スハ、位ニ依セテ果上ニ因果ノ功德ヲ具スルコトヲ顯ス、又權教ノ菩薩ハ住行向地ヲ  
過テ、實教ノ位ニ入ルコトヲ示ス為ナリト云ヘリ、然ルニ此ハ實教ノ觀智ノ法体ニ別ナキコトヲ顯ス辺ノ  
ミヲ執シテ、人ノ効能ニ明昧淺深アルコトヲ忘ル、故ニ、今之ヲ破スル也。假令ハ太陽ノ体ニ約セハ、曙  
モ正午モ別ナケレトモ、光ノ働ニハ明昧ノアルカ如シ、觀智ノ体ヲ論スルトキハ初住ノ位モ三千十<sup>(45)</sup>相  
也、妙覺ノ位モ三千十相也、因果不二ニシテ別ハナケレトモ、轉情成智ノ人ノ効能ニ付テ論スレハ明昧淺  
深ノ別アリ、之ニ由テ華嚴經ニモ十住十行等ノ諸位ヲ説テアリ、若シ華嚴宗ノ如ク偏ニ法体ノ円融ヲ談ス  
ルナレハ、平等法界ニ迷悟ノ別ナシ、鬼モ仏モ別ナシ、然ルニ華嚴ニ於テモ人ノ修証ニ付、諸位ノ淺深ヲ  
明スコトアレトモ、彼ハ淺深ヲ明スルヲ以テ行布寄顯門トスル也

#### 七十四義 円教教主

五十九左、若論教主亦名尊特トアリ、凡テ教主ハ所化ノ機感ニ応スル者故ニ、藏教ノ仏ハ劣応身、通教ノ  
仏ハ帶劣勝応身ナリ、別教ノ仏ハ須現尊特身也、円教ノ仏ハ不須現尊特身也、此ハ丈六ノ劣応身即微妙丈  
<sup>(46)</sup>法身ト見ルコトニテ、固ヨリ今教ニハ開權顯實シテ、前三教ノ仏即チ円仏ト示スカ故ニ、劣応即法身  
也、又尊特、又前三教ニハ三身格別ナレトモ、円教ノ三身ハ三一互融シテ一身即三身、三身即一身也、故  
ニ法身ノ一を挙テモ三仏具足シテアリ、乃至応身ノ一ヲ挙テモ三仏具足セリ、之ヲ三身即一ノ如来ト云也、

六十右ニ文句ノ解ニ隱前三相とあり、隱前三相トハ、前三教ノ仏ハ修成ノ仏身ナルカ故ニ、尽ク廢スルオトナリ、示不可思議如虚空相トハ、性具ノ微妙ノ法身ノ相ヲ顯スルコトナリ、性具ノ仏ナレハ報身応身ノ当体即法身ナルカ故ニ、一切處ニ遍スル如、虚空ノ真<sup>(47)</sup>相ニテ而モ三仏相即スル性具ノ仏ナレハ、不可思議也、之レ円教ノ佛、此ニ付、三仏相即無有一異ト云ハ、法身説法を許スヤ否ト云フニ、固ヨリ法身佛ニ説教アリ、十不二門指要鈔ニ問答アリ、其心ハ三身ノ徳用各別ナル辺ニ約セハ、法身ハ自証ノ理ニシテ對機ノ身ニアラサレハ無説也、若シ三身相即シテ法体無別ノ辺ニ約セハ無説即説也

#### 七十五義 寂光有相

六十右、円教ノ法身仏ノ所居ノ土ヲ常寂光土ト名クルニ付、法身寂光有相無相ノ論アリ、正家ニハ有相トシ山外ニハ無相ト立ル、此法身ト寂光トハ、身土ノ異ナレハ固ヨリ同体ニシテ、依正不二ナルカ故ニ、寂光土ニ付辨スヘシ、其心ハ寂光土ニ色相莊嚴アリ、円教ノ心ハ事理不二ニシテ、法性ノ理体ニ依正色心ノ諸法ヲ具セリ、寂光常<sup>(48)</sup>土争デカ色相莊嚴ナカラシヤ、仁王經ノ法性ノ五陰、法華ノ世間相常住ノ文、其明証也、四明ノ妙赴証<sup>(49)</sup>ニ此等ノ文ヲ引テ、寂光有相ノ義ヲ顯セリ、然ルニ妙樂ハ常寂光土端醜斯亡ト云ハ、染碍ノ相ノ亡スルコトヲ顯ハス文ニテ、微妙ノ相ヲ具スルコトヲ遮スルニアラサル也、約スルコトロ、此寂光土ハ鏡ノ如シ、此寂光土ノ鏡ノ上ニ種々ノ淨土ノ影像ヲ現スル也、然レハ前ノ法身説法ト同シク四土相即シテ、法体無別ノ辺ニ約シテ寂光有相ヲ談スル也

第七十六 六即判位

六十左以下、前来明ス所ノ円教ノ位次ヲハ、六即ヲ以テ判ス、其六即ヲ以テ円教ノ位ヲ判スルユヘンハ、増上慢ノ咎ヲ離シメ、又自屈ノ心ヲ生スル咎ヲ離レシメンカ為也、其故ハ即ヲ知テ六ヲ知ラサレハ、迷悟不二生仏一如ノ理ヲ執シテ増上慢ヲ起シ、我ハ仏ト同シキコトナリト思ヒ修行ヲ廢ス、又六ヲ知テ即ヲ知ラサレハ、徒ラニ我身ヲ卑下シテ、吾等ハトテモ仏ニハナリ難シト自屈ノ心ヲ起ス、初メハ暗禪者ト云テ、只座禪ノミヲ事トシテ、教門ノ位次ニ暗キ者ノ咎ナリ、後ハ文字者ト云テ、只教相ノ學問ノミヲ本トシテ、本具ノ理ヲ照サルゝモノゝ咎也、此二過ヲ離シメンカ為メニ、六即ノ階位ヲ立ル也、此ノ義六十四丁右ニ付テ知ルヘシ、又此六即ノ階位ヲ立ルハ、凡聖ノ不同ヲ顯サンカ為ニ六ノ名ヲ立テ、初後不二ノ義ヲ明サシカ為、即ノ名ヲ立ル也、凡ソ大小乗ニ渡テ、内凡外凡ト分証極証トノ四位ヲ別ツ、此四位ニ仏法未聞ノ者ト仏法已聞ノ者ヲ加ヘテ六位トシ、之ニ六即ノ名ヲ付タル者也、仏法未聞ノ者ヲ理即トシ、已聞ノ者ヲ名字即トシ、外凡ヲ觀行即トシ、内凡ヲ相似即トシ、分証ヲ分真即トシ、極証ヲ究竟即ト名クル也、集註六十一右ニ引ク妙宗鈔ニ、六種即名皆是事理云々ト、此、即ノ字ノ釈ニテ、事理体不二トハ隨緣ノ事用ト不變ノ理体ナリ、隨緣ノ事用トハ、理即ノ者ハ日夜惑業ヲ作り、名字即以後ノ者ハ觀行ヲ修スルナリ、不變ノ理体トハ、法ノ自性ハ更ニ變ラス、法ハ融妙ニシテ物ヲ隔テテサルカ法ノ自性也、故ニ事用ニ顯レタル造惡作善ノ其俛カ、法ノ緣ニ隨テ働クノ故、法ノ自性ニ背カサレハ、法ノ自性ハ真妄ヲ隔テゝ<sup>50</sup>生仏ヲ擇ハサル故、理即ノ者ノ事理ノ法体モ究竟即ノ仏ノ事理ノ法体ニ<sup>51</sup>全ク不二也、故ニ事理ノ体不二ノ義ヲ即ト云也、此ニ付、此六即ハ其所據アリヤト云ニ、六十一左觀經ノ疏ニヨリテ、貧女全宝等ノ經文ヲ引テアリ、此ハ涅槃經ノ中にニ述タル喩ニテ、貧女ノ家ニ宝藏アルハ理即也、知識之ヲ示スハ名字即也、

衆穢ヲ耘除スルハ觀行即也、漸々ニ近クコトヲ得ルハ相似即ナリ、近キ終リテ藏ヲ開クハ分真即ナリ、悉ク取リテ之ヲ用ユルハ究竟即ナリ

#### 七十七義 理即仏義

六十一丁右、六即ノ中、理即ノ義ヲ明スニ付、涅槃經ノ一切衆生皆有仏性等ノ諸文ヲ引テアリ、惑ノ衆生モ仏性真如ノ理ヲ具スレトモ、解行証ノ徳ノ欠タルモノニテ、唯実相ノ理ヲ具シナカラ迷テ居ル者ヲ理即仏ト云フ、集註六十二丁右ニ、然理即仏貶之極也トアリテ、至極貶メタル名目ナリ、何故ナレハ解行証ノ修性<sup>52</sup>ニ乏シクシテ、唯理性ヲ具ヘタルノミノ仏ト云フコトナリ、其解行証ノ即トハ、解トハ我身本來仏ナリト言フコトヲ解了スル名字即ノ位ナリ、次ニ行トハ現<sup>53</sup>行ヲ修シテ理仏ヲ照ラス現行即相似即ノ位ナリ、次ニ証トハ本來ノ理仏ヲ証スル分真即究竟即ノ位ナリ、如此後ノ五即ハ解行証ノ修徳ヲ起セトモ、今ノ理即ハ否<sup>54</sup>ラスル故、理性ノ仏ト名ケタルモノナリ、然レハ理即仏ト云ハ解行証ノ修徳ニ撰フノ名ニシテ、惑業ノ事用ニ扱フノ名ニアラサルナリ、故ニ六十二丁右ニ謬解ヲ遮シテアリ、理即佛ト云ハ惑業ノ迷事ヲ取除ケタル但理ノ事ニアラス、三障ノ事用即本具ノ理性ナレハ、三障ノ当体即仏ナリト示ス、此義ヲ委ク明スガ、六十二丁右ニ引ク所ノ妙宗鈔ノ文ナリ、日夜ニ起ル惑業ノ事用ハ全ク本具ノ理性ナレハ、迷事ノ当体理即仏ナルコトヲ顯ハスナリ

第七十八 世間常住

六十一右、十界均ク仏性真如ヲ具スル相ヲ明スニ付、妙宗鈔ノ文ヲ引ケリ、世間トハ十界三千ノ世間ニテ、即チ俗諦差別ノ相也、其世間差別ノ当相、即チ法ノ自性ノ徧ノ顯ハル、故ニ、真如ノ法位ニ住スト云也、然レハ世間ノ相ガ真如ノ法位ニ住スルト云ハ、世間ノ事用ガ本有ノ理体ト別ナラサルコトナリ、真如是萬法々は真如ナレハ、世間ノ当相其徧常住也、然ルニ諸法遷流ノ相ヲ見ルハ迷情ノ所為也、悟理ノ智見ニ約スレハ、諸法即常住也、円教ノ心ハ俗諦差別ノ森羅ノ諸法、尽ク不生不滅也、如何トナレハ、真如実相ヲ全シテ森羅ノ諸法トナルカ故ニ、起滅流動スル世相ノ当所、即チ真如実相ニアラスト云フコトナシ、然ルニ妙樂ノ言ニ真無生滅俗有生滅ヲ判スルハ、真俗對別ノ一応ノ義ニテ、円教ノ心ハ真俗ノ二諦共ニ不思議ニシテ不生不滅也、俗諦如何デカ生滅ナラント立ル也、悉クハ二百題十ノ廿一俗諦常住ノ一題アリ

七十九義 十如是義

六十一右ニ引クトコロノ涅槃經ニ、性相常住ト説ク、性相トハ十如是ノ中、初ノ二ヲ挙クル、此十如是トハ法華ノ方便品ノ説ニテ、不可言説ノ実相ノ理ヲ強テ言ニ顯シテ説キタルガ十如是也、即チ經文ニ仏所成就第一希有難解之法唯仏與仏乃能究尽諸法実相所謂諸法如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等トアリ、此十如是ヲ略法ケ(55)ト称ス、此十如是ハ一心所具ノ十界ノ相を説

第八十 無情仏性

一色一香無非中道ナレハ色香素ヨリ非情也、其非情ノ当体即中道也、中道ナレハ真如也、真如即仏性也、  
仏性ナレハ成仏スルコト勿論也、円覚經ニ衆生国土同一法性トアリ、依正不二ナルカ故ニ有情ノミ成仏ル  
ニアラス、無情モ成仏ス、草木国土悉皆成仏ト云フ之ナリ、然ルニ之未<sup>56</sup>有情無情ノ差別ヲ見ルハ、迷  
情ノ所為ニテ偏權ノ教ノ心ヨリ云フコト也、円実ノ教ニハ色心不二依正不二也、然ラハ無情ニ仏性ヲ具ス  
ルト云ハ、草木瓦石モ修用ヲ起シテ仏性ヲ開覺スルコトアリヤト云フニ、此義無論也、然レトモ迷情ヲ  
以テ有情ト無情ト隔ル心カアリテハ、円頓大教ノ唯心ノ法門ハ解シ難シ、抑モ唯心ノ法門ヨリ云ハ、一人  
觀行ヲ起シテ修行スルノハ法界ノ

第八十二 兩種三千

六十四丁右、重ネテ六即のノ二字ヲ釈スル文ニ付、事理ノ三千ヲ明セリ、之ヲ理造事造トモリトモ云フ、  
リリ理造ト云ハ如何ト云フニ、之レハ事理不二ナルカ故ニ理体ヲ全シテ事用ヲ起ス故ニ、事ニ造ノ義アレ  
ハ理ニ素ヨリ造ノ義アリ



注

(17) 敗傷  
(16) 業等  
(15) 発開  
開発  
(14) 発破  
(13) 場乗  
(12) 同等  
(11) 耶那  
(10) 耶那  
(9) 北法  
(8) 北法  
(7) 元玄  
(6) 陶淘  
(5) 陶淘  
(4) 対惧  
(3) 談断  
(2) 物仏  
(1) 物仏

(34) 見思  
(33) 太  
(32) 証生  
(31) 事実  
(30) ノ  
ト  
(29) 十実  
(28) 心身  
(27) ノ  
モ  
(26) 一三  
(25) 二殊  
(24) 覚教  
(23) 原玄  
(22) 如此  
此如  
(21) 地智  
(20) 族続  
(19) 信真  
(18) 處據

(51) ニ  
モ  
(50) テ  
ス  
(49) 赴証  
宗鈔  
(48) 常浄  
(47) 真身  
(46) 丈浄  
(45) 十実  
(44) 心信  
(43) 心信  
(42) 信真  
(41) 性徳  
(40) 四五  
(39) 解般  
般解  
(38) 蔵密  
(37) 槃般  
(36) 門文  
(35) 假住

(56) 之未  
元来  
(55) ケ  
華  
(54) 否然  
(53) 現観  
(52) 性徳

一 高嶺三吉略歴

- 一八六二（文久二） 八月、加賀国金沢に士族であった高嶺清定の次男として生まれる。
- 一八七六（明治九） 石川県立啓明学校入学。
- 一八七八（明治十一） 石川県立中学師範学校普通学科入学。
- 一八八〇（明治十三） 石川県立専門学校文学科入学。哲学史、理財学等を学ぶ。
- 一八八二（明治十五） 石川県立専門学校文学科卒業。同校の英語教員となる。
- 一八八三（明治十六） 東京大学文学部哲学科に選科生として入学。
- 一八八七（明治二十） 五月に脳症を発病。七月、永眠。

なお、一八八八（明治二一）年、友人たちにより「印度哲学」「降霊術を論す（スピリチュアリズム）」を収録した『高嶺君遺稿』が出版された。「降霊術を論す」は英文で書かれていたが、本書では高嶺の同窓であった清沢満之（一八六三～一九〇三）と岡田良平（一八六四～一九三四）によって日本語に訳されている。また、本文の後には、吉谷覚寿により「風裏落花亦可憐 一朝辞世去黄泉 昔時談笑猶如夢 独对遺編淚潜然 哭高嶺学生之死」という文言が寄せられている。

## 二 吉谷覺寿略歴

- 一八四三（天保十四） 八月、美濃国石津郡徳田村の真宗大谷派・浄厳寺に父・円海の長男として生まれる。幼少期から観月に師事し、その後、高倉学寮にて宗乗余乗を学ぶ。
- 一八六六（慶応二） 浄厳寺内に研精学舎を開き、漢学、仏書学を教える。
- 一八七三（明治六） 浄厳寺内に鴻漸北校が開校され、漢学、筆道の教員となる。
- 一八七七（明治十） 東京教校教授に就任。
- 一八八一（明治十四） 東京大学文学部哲学科の印度哲学講師に就任。
- 一八八五（明治十八） 東京教校校長に就任。
- 一八九〇（明治二三） 帝国大学を辞職し、高倉大学寮教授に就任。擬講となる。
- 一八九六（明治二九） 嗣講となる。
- 一九〇一（明治三四） 講師となる。
- 一九〇六（明治三九） 一乗院の称号を授かる。
- 一九一一（明治四四） 真宗大谷大学教授に就任。
- 一九一四（大正三） 三月、永眠。

主な著書に『仏教概論』『明治諸宗綱要』『天台四教儀集註』『阿弥陀経講義』等がある。

### 三 吉谷覺寿の印度哲学講師着任の経緯

一八八一（明治十四）年、東京大学文学部では、哲学政治学及び理財学科から哲学科を独立した学科とし、正式科目の一つとして「印度及支那哲学」を置いた。印度哲学という科目は、それまで選択科目とされていた「仏書講義」を改称したものであり、実質的な内容は仏教学であつた。また、翌年には、「印度及支那哲学」を含む「東洋哲学」という科目が増設されており、印度哲学と称された仏教学は、東洋哲学というカテゴリーの中に位置づけられることになる。

印度哲学の初代講師は、原坦山（一八一九～一八九二）である。その後、吉谷が講師に加えられた経緯については、東大総理であつた加藤弘之（一八三六～一九一六）に、東京小石川戸崎町の念速寺の住職が「坦山翁は禅門の悟道の方にて、教相学者にあらず。殊に天台学などは全く学びたることなき人なり。因て今一人教相専門学者の増聘せられ度由を申上げ」（井上円了「加藤老博士に就きて」『東洋哲学』第二二編、第七号、一九一五年、二ページ）吉谷を紹介したとされている。

原は、儒学とともに漢方医学を学んだ後、曹洞宗の門に入った禅僧である。また、念速寺の住職の指摘とは異なり、実際には比叡山に入り天台教学も学んでいる。しかし、その後、解剖学や神経生理学を学んだ坦山は、極めて独創的な医学的仏教理論を構築する。それは、従来の伝統的な仏教理解とは大きく異なるものであつたため、近藤は、仏教の正当な教相学者を加える必要があるという提言をしたものと思われる。

ところで、明治の仏教界は、廃仏毀釈を始めとし、キリスト教の解禁、哲学や自然科学の導入による合理的思考の重視、神道国教化への動きなどにより、その存在は危機的状況に置かれていた。こうしたなか、

東京大学という最高学府において、仏教が正式科目の一つにされたということは、将来、国家を担う学生たちにとって、仏教は学ぶべき分野であると認められたことを意味する。また、仏教はインドの哲学であり、東洋哲学の一つとみなされたことにより、仏教は西洋哲学と同等に位置づけられたといえる。そこで吉谷は、このようなカリキュラムの改正を歓迎し、仏教復興の足掛かりの一つとなると考え、講師の職を引き受けたものと推測される。

#### 四 『天台四教儀』の講義目的と方法

吉谷は『天台四教儀』に先立ち、『八宗綱要』の講義を行っている<sup>(1)</sup>。『八宗綱要』の著者は、鎌倉時代の擬然(一二四〇～一三二一)であり、仏教が伝播した歴史と、八宗(瑜伽宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・天台宗・華嚴宗・真言宗)の歴史及び教理が簡潔に説かれたもので、八宗の概要を知ることのできる入門書とされている。したがって、「教相専門学者」として東京大学に招かれた吉谷は、まず、仏教の歴史と各宗派の教理についての基礎知識を習得させるため、『八宗綱要』を講じたと考えられる。

一方、『天台四教儀』は、高麗の諦観(？～九七一)が執筆したもので、鎌倉時代に誕生した日蓮宗・浄土宗・浄土真宗などの原点となった天台教学の入門書である。先に述べたように、原はこの天台教学を学んでいないとされ、吉谷の招聘へとつながったのである。そこで吉谷は、『八宗綱要』について講じた後、八宗のなかでも日本仏教の母体となった天台教学に関する知識の修得を目標とし、『天台四教儀』を講義内容として選んだものと思われる。また、天台教学は、修行のみならず教説の理論的究明を肝要としている。したがって、吉谷は天台教学を通じて、仏教は西洋哲学に匹敵する理論的内容をもつものであることを示

そうとしたのではないだろうか。

ところで、『高嶺遺稿』によると、吉谷が使用したテキストは、『天台四教儀』の注釈書の一つであり、元の蒙潤（一二七五―一三四二）が執筆した『天台四教儀集註』であることがわかる。吉谷は、後に大谷教校においても『天台四教儀集註』をテキストとした講義を行っており、その手控えに筆を加えたものを『天台四教儀集註略解』として、一八九八（明治三一）年に出版している。『高嶺遺稿』の多くの部分はこの著書の記述と合致している。

また、吉谷の講義は、計八二の項目を立て、各々について解説するという方法を用いている。その理由については、『東京大学年報 第五卷』によると「強チニ教科書ノ文句ヲ解釈セス務メテ其義脉ヲ了知セシムルヲ目的トス故ニ四教儀一部ノ顛末ニ亘リ其精要ヲ採択シテ教観大綱五時八教等ノ若干ノ科目を設ケ」（五一―ページ）たのだと述べられている。

注

（１）佐藤厚「井上円了『八宗綱要ノート』の思想史的意義」（『井上円了センター年報』第二二号、二〇一三年）によると、東洋大学附属図書館に所蔵されている井上円了の『八宗綱要』は、吉谷による『八宗綱要』の講義内容もしくは吉谷の手控えを書写した筆録であることがほぼ間違いないだろうとされている。

## 参考文献

井上円了「加藤老博士に就きて」『東洋哲学』第二二編、第七号、一九一五年。

梶井重明「高嶺遺稿」をめぐって―西田幾多郎とカントとフェノロサ―『こだま…金沢大学附属図書館報』

第一四二号、二〇〇一年。

柏原祐泉・藺田香融・平松令三監修『真宗人名辞典』法蔵館、一九九九年。

岐阜県海津郡南濃町編『南濃町史 通史編』岐阜県海津郡南濃町、一九八二年。

佐藤厚「井上円了『八宗綱要ノート』の思想史的意義」『井上円了センター年報』第二二号、二〇一三年。

「吉谷覚寿の思想と井上円了」『国際井上円了研究』第三号、二〇一五年。

「吉谷覚寿の東京大学仏教学講義」『中央学術研究所紀要』第四六号、二〇一七年。

東京大学史史料研究会編『東京大学年報 第五卷』東京大学出版会、一九九四年。

東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史1』東京大学出版会、一九八六年。

早川千吉郎編『高嶺君遺稿』早川千吉郎、一八八八年。

※本書は、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「明治期の東京大学における印度哲学および支那哲学講義の思想的意義」（研究課題番号二五三七〇〇一二）の成果の一部である。翻刻にあたっては、佐藤厚氏（東洋大学東洋学研究所客員研究員）、福元啓介氏（尚古集成館研究員）にご協力いただいた。また、岐阜県海津市に在住する栗田俊文氏より、吉谷覚寿に関する資料を提供していただいた。いずれの方々には深い感謝の言葉を申し述べたい。

## 著者略歴

### ■鈴木 朋子（すずき ともこ）

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程修了（人文科学博士）

お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所研究協力員

首都大学東京、東邦大学非常勤講師

## 専門

日本倫理思想史

## 主な著作

「清沢満之における至誠心と道徳」（『第26回梶島敏賞入選論文』2011年）

「吉谷覺寿における仏教復興の道」（『近代仏教』第23号、2016年）

「煩悶苦痛からの解脱—佐々木月樵における内観と信仰」（『総合人間学研究』第13号、2019年）

## 『高嶺遺稿』印度哲学（吉谷覺壽口授・天台四教儀）翻刻

2019年9月20日 発行

---

著 者 鈴木 朋子

発 行 お茶の水女子大学附属図書館(E-book サービス)

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

<https://www.lib.ocha.ac.jp/>

電話 03-5978-5835 FAX 03-5978-5849

**ISBN 978-4-904793-25-1 C3010**

本著作の著作権は著者が保持しています。著作権法上の著作権の制限を超える利用については、お茶の水女子大学附属図書館にお問い合わせください。